
弱いからこそ強くなれる！

かみかみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱いからこそ強くなれる！

【Nコード】

N7277V

【作者名】

かみかみん

【あらすじ】

人生つていうのは予想外の連続だ。 だつてさっきまで寝ていたはずなのに気が付いたら……猫かよ！ そもでもってココどこだよ！？ え、異世界！？
え、猫つてのは勘違いなんですか？

第一幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので
す。

第一幕

ファンタジーな世界というのは誰しも憧れを抱く事があると思う。フとした拍子に読んでいる漫画の世界の主人公に自分を置き換えてみたり、人によってはその想いを物語にしてネット上に掲載する人もいるはずだ。

人は常日頃から軽く現実逃避をする瞬間がある。ストレス社会の中における発散方法の一つといったらそれまでなんだが…

しかし、幾ら憧れを抱こうが、所詮は絵空事。

実際はそんなことが起きるはずがない……と言うのは常識と言っても過言ではない。寧ろ本気にしている奴は少しばかり病んでいる可能性が濃い。

勿論、俺のなかでもそんなことは起きる筈が無いって言うのは常識だったし、そこまで現実を捨て去った覚えもなかった。

さて、聡明な方なら、今し方俺が言った言葉の真意に気が付くことだと思う。

…ん？真意も何も、変なことは言っていないってか？

いやいや、少し前の文章をきちんと一字一句洩らさずに読んでみ。俺はこう言ったんだ。「現実を捨て去った覚えもなかった」「ってね。

つまりはそういう事だ。わざわざ過去形に言い直したんだ。何かあったと言う事は簡単に想像がつかだろう。

……うん、現実逃避はこれくらいにしたいと思います。取り敢えず一言だけ言わせてくれ。

「にーににに？（どうしてこうなった？）」

今の俺の言葉を聞いて今現在俺が陥っている状況をぴたりと答えることができた奴は間違いなく賢者であり、超能力で俺の心の内を読める奴だと思う。

さてさて、先に言っておくが別に街中を歩いていて運転手が居眠りしているトラックにぶつかったり、隕石が直撃したり、美少女に背後からナイフでズドン！…ってされた訳ではない。

俺の記憶が正しければ、例年に見ない猛暑の今年、夏の暑い盛り
の昼間にクーラーの壊れた講義室にいた筈だ。決して広くは無いその部屋には学生が100名程缶詰め状態になり、その前では大汗をかきながらもスーツを着ていたバーコード禿の教授が自分の若かりし頃の武勇伝を語りだしていた。

勿論、殆どの学生がそんな話をまともに聞ける状態では無く、うちわを扇いで凌ごうとする奴、誰かれ構わず話しかけて取りあえず暑さを紛らわそうとする奴、耐えきれずに夢の世界へと旅立つ奴。そんな状況下に俺はいた。

そんな地獄ともとれる暑さの中、昔の武勇伝を聞かされても得なんて無いと判断した俺は熱気で温められて不快感の塊へと変化した机に突っ伏して夢の中への逃避を行ったというのは覚えている。

まどろむ意識の中、額を汗が伝っていく嫌な感覚と講義室に響く教授の声が段々と遠ざかっていくのだったってなんとなく覚えてる。そしてふと気が付いたら……

「にに？（毛？）」

なぜ毛？しかも、人が有する様な薄い毛じゃなくて結構濃

い毛だし。更には何だか銀色っぽい。いや、そもそもなぜ知らぬ森の中？ 此処日本かよ？ っていうか、今更ですが何で俺の身体にこんなに沢山の毛？ いやいや、それはさっき考えたから。

こういうのって一度死んで生まれ変わりましたってネタは幾分か聞いたことがあるけれど、俺寝てただけだし！ 寧ろ、そもそもすぎに突っ込んで良いのかすらわからねえ！？

いや、少し待て俺。この毛は間違いなく動物のソレ！ つまり、何かの動物になっちまったという事か？ つまりはテレビを見ることも出来なくなっ手なんか肉球なんだからゲーム機すら持てなくなっ…… ああ… 折角始まった連ドラも殆どみれてねえ… あああ！ しかも、先週買ったばかりのゲームを全然プレイできてねえし！

……人間ってあれだな、あまりにも常識はずれな事が起きるとマジで混乱して訳の分からん事を考え出すもんなんだな。

今まさに現在進行形でソレに直面している俺だからこそ吐ける言葉だなコレ。

と、取りあえず少し落ち着け俺。冷静になるんだ俺。自分でも言っていたではないか。俺は確か大学の講義中に居眠りをしちまったんだ。だったらこれは夢と言う可能性が半端無く高い！

だってそうだろう？最後の記憶が居眠りした所で終わっていて、気が付いたら動物だぜ？

……しかし、そんな俺の淡い期待も数秒後には『疑問』という無常な言葉に姿を変えていった。なぜなら

ザーザー！

ザーザー！

「……にい（冷たい）」

突然降りだして待った豪雨とまではいかないが、それなりに勢いのある雨が俺の体に直撃しているからだ。そのせいで徐々にだが冷えていく俺の体……

……夢の中で雨？ しかも冷たいとか感じるだって？ 本当にコレって夢…なんだよね？ と、取りあえず、仮に夢だとしても雨に当たっているという不快感MAX状態を脱する為にも雨が凌げそうな所を探したほうがいい。

そんなこんなで俺は雨が凌げそうな場所を探す為に歩き始めたのだった。

・
・
・
・
・
・

さて、何だかわかんねえけれど横穴があってラッキーだったぜ。

取りあえず、雨風を凌ぐために其処ら中を歩いてると割と近くに良い感じに掘られた横穴を発見した俺は直ぐ様そこにかけて込んだ。しっかしあれだね。動物になったたって事だから二足歩行じゃなくて四足歩行での移動だったんだけれど、思いのほか四足歩行って簡単だったな。だって、歩き始めなんて四足歩行だって言う事を忘れてしまう位自然な歩き方だったんだぜ？

……そんな別の事を考えて気を紛らわせることよりも、今は状況の判断の方が先だと思う。

さて、仮に今俺がいるこの世界を夢だとしよう。この一言で片付いてしまえばどれだけ楽なのだろう。

だって、後は眼が覚めるまで待つていけばいいのだから。しかし、それは先程の雨の冷たさから薄まってしまった。夢である以上、視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚のうち視覚・聴覚以外は殆ど無いものと言ってもいい。…いや、正確には五感全ては無いんだが、この二つは想像でどうにでもなる。

ソレを踏まえて俺の状況だ。先程の雨の冷たさ…さらに毛越しではあるが雨粒が身体に当たる感覚、更には歩いた時に感じた足底に感じた地面を踏みしめる感覚。どれも夢からは考えられない感覚だ。これだけでも、夢である可能性は低い。更にもう一つ言うと、夢と言つものは寝ている間に記憶の整理をする時に現れるものである。其処には自分の意思は殆ど無く、自分でソレを夢だと認識する事はほぼ無く、自由に動き回れることもまず無い。しかし、今の俺はどうだろう？自分の意思はハッキリと保つことができ、更には……

ヒョイ、ヒョイ

俺は前足を少し上げて、犬の「お手」の様なポーズを取った。

このように手足も自由に動かす事が出来る。……この時点で「夢」という選択肢はついていたと言ってもいいだろう。

さて次の仮定だ。俺が何らかの「動物」になった。

……うん、どういふ経緯でこうなったのかは分からないけれど、これを事実とした場合が一番しっくりと来る。

感覚があるのも今俺がいる世界が現実だということがわかるし、俺⇨動物になったと考えるのが妥当なのかもしれない。

残念すぎる答えだが、それが答えである可能性が一番高い。しかし、だからこそ疑問に思えることがある。

色々世の中の摂理云々をぶっ飛ばしまくっているが、なぜ人間の俺が動物に変化しているかということだ。

そこでふと、先程まで考えていたファンタジー的な言葉を思い出した。

『転生』

仮にこの一言で解決できるとしたら、ある程度の辻褃は合う。講義の最中、何らかの理由で死んでしまったと仮定する。……仮定したくは無いが。

と、取りあえず、転生というものが本当にあるとしたら、それに俺が当てはまったと思えばいい。

むしろそれ以上の応えは今の俺には出す術はない。

自分が死んだかもしれない…その言葉自体は割りとあっさり受け取ることができた。

そもそも、将来のビジョンも何も無くただ単に大学生活を送っていた俺からしてみたらお先真つ暗な世界に大きな未練は残していない。…いや、家族とか友達とかは未練タラタラだし、見たいテレビもあるしゲームだってしたい。

だけれど、それ以上に生きる事にさめてしまっている自分がいた。それは紛れもない事実だ。

あと数ヶ月もしたら就職して生きるためにセカセカ働き通していき人生だった。…いや、周りはそうかもしれないけれど、少なくとも俺の就職は未だに決まっていなかった。そんな中でもあせる表情

することなく淡々と毎日を過ごしていた俺だ。いつかは潰れていたと思う。

だったら訳の分からないまま始まった俺の第二の人生を楽しむべきではないだろうか？ 人間でない以上、働く必要は無いし、食べて寝て食べて寝てを繰り返す日常を送ればいいのだから。…いや、それは幾らなんでもないか。

どのように生きていけばいいのか分からないのは現在も一緒かもしれない。人が住んでいる気配ゼロの森の中にある洞穴で雨宿りをする俺。食料はどうすればいいのか？仲間とかはいないのだろうか？俺がなっているこの動物は何なのか？この森には天敵はいないのか？

さまざまな事が俺の頭を過ぎって行く。何となく自分の手…いや、前足に目をやる。そこには突っついてみたくなるほど小さくて可愛らしい肉球がある。しかも、小さいながらも人の皮膚なんかは簡単に切り裂く事が出来そうな鋭い爪が見え隠れしている。

比べるモノが無いからどれくらいの大きさは分からない。前足から視線を外して今度は洞窟内を見回してみる。今の俺の体がどれくらいの大きさなのかは分からないが、人間の視点寄りには間違いないくらい低い。更に言うのであれば、その辺に生えている雑草にも背丈は負けている。

考えたくは無いが、見た所犬と言うよりも猫に近い丸みを帯びた俺の手前足そして、明らかに小さすぎる俺の視点の高さ。

……つまり、猫になった可能性が一番高いという事だ。

いや、だからこそ分からない所もある。俺の記憶が確かならば猫とは母猫が付きつきりで世話をする動物だと認識している。いや、猫だけでは無くネコ科に属する動物は勿論のこと、寧ろ哺乳類のほとんどがそういう生態の筈だ。

しかし、俺の近くには母と思われる動物の存在は認めていない。それどころか、俺以外に動く影と言ったら雨風によって不気味に揺

れている木の葉と雑草ぐらいなものだ。

簡単に考えたら殆どの動物が何処かに身を潜めて雨宿りをしているのだろう。結構強い雨だ、下手をすれば低体温症なんて者も考えられる。そうなたら野生の動物では命にかかわる可能性だってある。

実質、俺の小さな体は少し当たった雨の所為で大分冷え切ってしまったている。意識はしていないが足なんかは結構振るえている状態だ。最も、直ぐに洞穴に入ったおかげで幾分かは身体が暖かくなってきた。

……クウ

そんな時、洞窟内に何やら可愛らしいくもった音が響いた。決して大きくない音であったが、雨音以外の音は以外と響くものであるようだ。一瞬、別の生物がいるのかと思ひ洞窟の奥へと慌てて顔を向けた。しかし、直ぐにその音の発信源が何処だか理解した。

「に……ににい（腹……へった）」

まさかのまさか、どうやらこの小さな俺の腹から発せられた音のようだ。ソレを理解した瞬間、言い知れぬ空腹感が俺を支配した。

赤ん坊と言うのは思ひのほか腹が減るのは早い。どうやら、ソレは人間だけでは無く他の動物にもいえることなのだろう。少なくとも俺がこの体になってから、一時間は経っていない筈だ。この体になった瞬間は少なくとも空腹感を感じていなかった。つまり、この一時間でお腹がすく程、燃費が悪いという事……

弱った、果てしなく弱った。この体が子猫である以上、主食となる者は母猫の母乳だろう。最も、俺がソレを素直に飲むかは別なんだが。俺だって記憶上、数十分前まで人間だった記憶がある。

ソレがすんなりと猫化してたまるものか。

これが人間の赤ん坊になったら、まだ人間の母乳と言う事で少しは譲歩できたが、何が悲しくて動物の母乳を飲まなければいけないのか。それだったら、その辺の水を飲んだ方がましだ。

さて現実問題、腹が減った俺が何を食せばいいのかが問題だな。

母猫がいなくて、さらに母乳を飲みたがらない俺。要は、ソレに変わる食べ物調達しないといけないという事だ。

そういえば、この体は離乳期を過ぎているのだろうか？ 離乳期を過ぎていなければどんな食べ物だって消化不良を起こして吐いてしまう。

まあ、物は試しだ。猫って確かライオンやチーターと同じく肉食だった覚えがある。あるいは、魚を啜えて走っているイメージもある。仮に動物の肉食を食する場合は半端ない覚悟が必要だ。

さっきまで人間だった俺に生き物を殺して食べるなんて覚悟が果たしてあるのか？ こうやって言葉にして言うのは簡単だが、普通に暮らしていた奴には結構、酷な作業だ。ソレに根本的にハンティングなんてものはやったことがない。

その点、魚の場合は生で食べるという世界的に見ても稀な食文化をもつ『日本人』だった俺からしてみたら罪悪感という観点から言うと、肉を食べる事よりも幾分か低い。

それに、元々俺は肉よりも魚派だ。しかも、好物は魚の刺身ときている。最も川魚の刺身は残念ながら食べた事は無いんだけど……

しかし、今は四の五の言っている時ではない。正に文字どおり生きるか死ぬかの選択肢に近い。

そうと決まれば、早速行動に移してみないといけないんだが……

ザーザー

相も変わらずの大雨の前で断念せざるを得ない状況であった。

それに、よく考えたらどうやって魚を捕るんだ？

釣竿はない、あつても持てない。素手で捕る技術なんてあるはずもない。

……あれ？ もしかして積んだのか？ いやいや、少し待て

よ俺。この体は猫（？）と言えども頭脳は元・人間なんだ。こういう時こそ頭を使うんだ。

この体は可愛い猫（？）なんだ。もしかしたら人里で餌付けをしてもらえる可能性がある。……しかしながら、この森の中を空腹状態で尚且つ豪雨という悪条件真つ只中を何処にあるかも分からない人里を探すのは流石に無望か……それに、此処が日本とは限らない。下手をすれば海外の樹海のと真ん中という可能性だってあるんだ。うん、この案は却下だな。

さて、次は野良っぽく残飯を食ってみようと言う案だが……これは有無を言わずに却下の方向性で。

必要に刈られたらやるかもしれないが、流石にこの案に縋っては生きていたくないかな。

.....

……ふう、色々と考えたがことごとく却下な展開になったな。

しかし生きていく以上、何かを食べなければ餓えて死んでしまう。いつそのこと、その辺に生えている植物でも食べてみるか？ ……

…いや、これは一番やつちやいけない選択肢の筈だ。猫にとって植物は有害なものばかりだと何かの番組で見た覚えがある。

……こうなったら一番は魚、よくて肉、餓死寸前になったら昆虫などで手を打つ事にしよう。幸い、ヘボ（蜂の子）やイナゴは爺ちゃんや婆ちゃんの影響で、それ程嫌悪感はない。でも、出来ることなら人らしい食事がしたいぜ。

そんな事を心の中で一人愚痴りながら俺は食糧を求めて洞窟の奥へと足を運んだ。洞窟内はひんやりとはしていたが、決して寒いという事は無く快適な温度を保っていた。しかし、その分何故だか湿度が異様に高いと感じられる。つまり、この洞窟の中に水に関する何かが存在するということであろう。

もしかしたら地底湖か……いや、もしかしたら海に繋がっている可能性だつて否定できない。自分が生きる為に食料を調達する為に洞窟内を一人進んでいるが、まるで『冒険』をしているかのような気分になり少しだけテンションが上がってくる。

しかも、洞窟内は暗かったが俺のスペックが猫に変化していることもあり夜目がきいていた。更に、時折外に繋がっているような穴が天井に開いていたため、難なく洞窟の奥へ奥へと進むことができた。

時間にして2時間程歩いただろうか。俺の進む足が止まった。別段空腹が限界値を超えた訳ではない。ただ単に洞窟の最深部にたどり着いてしまっただけである。その間、湖などは存在せず辺りはジメジメした壁だけであつたが、最深部は如何やら勝手が違つていたようだ。

まるで人が作ったかのようなドーム状にひらけている。しかも、今まで歩いていた所とは違い、完璧に外界と接触する部分は存在していない。しかし、どういふ訳かこの中は闇に支配されていない

のだ。

原因は直ぐに分かった。専門的な事は詳しくないが、ドーム内の至る所に薄らと青く光り輝く鉱物が存在していたのだ。

漫画やゲームなどでは幾度となく存在する魔鉱石のようなものと第一印象で感じてしまった俺は途轍もなくロマンもへったくれも無い人種かもしれない。

しかし弱った……俺はこの洞窟内を観光しに来たのではない。

食料を求めてきたのだ。だが、この洞窟内には猫が食べられそうなものは何一つ存在していない。

キュウ〜グルル……

大した働きもしていないのに自己主張ばかり強くなっている自分の腹に少しだけ苛立ちながらも俺はドーム内を食べられるモノがないかを必死になり探りまわった。しかし、ドーム内にあるものは岩壁と光り輝く不思議な鉱物だけで、俺の食べられそうなものは存在していない。

この際、なりふり構っていられないと持てそうな小さな石をひっくり返して虫が居ないかも確認した。しかし、結果は残念なものであり、俺以外に生命活動をしている姿を確認する事は出来なかった。

如何やらこの洞窟には食べ物は存在していないようだ。散々な結果に軽く目眩を起こして倒れ込みそうだったが、其処は気合で自分の足を奮い立たせて地に足を付けた。

しかし、そこで新たな問題が発生してしまった。俺は此処に来るまでに2時間以上洞窟内を歩き続けたのだ。さつきまではある程度の余裕があったが、空腹が結構限界まで来た俺に果たして戻るだけの体力があるのであるだろうか？新たに直面した問題に今度こそ目眩を起こして地面に転がろうとしたが、その時俺の視界にとある

ものが入ってきた。

別だん見慣れないものではないし、今まで何度も見てきたものだ。しかし、だからこそこの場に会ったら限りなく不自然なものである。寧ろ何故今の今まで気がつかなかったのかが不思議に感じるものである。

「……………に？（扉？）」

一枚岩を削って作ったであろう、俺の視界には重厚な出来の岩で出来た大きな扉が入ってきたのだ。

第一幕（後書き）

読んで頂きましてありがとうございます。

この話は以前から考えていたもので、掲載する予定は無かったのですがリハビリ的な意味で掲載していきます。

当然の如く更新速度は遅く、二次創作の方を優先して書いて行きますので、偶に覗いて頂けると光栄です。

第二幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第二幕

人と言う生き物は何か未知なものが眼前にあると2パターンの行動に移るものである。一つは未知なるものに対して恐怖し、深く関わろうとしないタイプ。そして、もう一つが……

「……ににに……ににに？（……なんだ……これ？）」

ただひたすらに己の欲望のままに動いてしまうタイプである。こういうタイプ分けは後々にその人の生活に大きな影響を残す。前者のタイプは企業に就職した後、出世もある程度して普通に暮らしていくタイプ。後者のタイプは自分から会社を興して大成功を収めるか、身の破滅を呼ぶタイプ。

大まか過ぎるわけ方ではあるし、そもそもこれ通りに当てはまらない人間だっている。そして、この人間から猫（？）になってしまった男は限りなく後者のタイプであった。

これ以上何にも失うことのない恐怖感諸々が無いこの男にとってその先になにかがあるかもしれないその扉は自身の好奇心を刺激する分にはちょうどいいものであった。

足元を少しふら付かせながらもその扉に近づいて行く見た目子猫の男。その視線はまるで魅了されたかのように扉を一身に見つめている。内なる思いはただ一つ。

「に……にににに？（飯……あるかな？）」

とにもかくにも自身の空腹を満たす事のみである。恐らく今の彼の目の前に何かしら自立で動くものがあれば、それがたとえ見た目がグロい芋虫であろうと強靱な皮膚を持つ巨大な草食獣であろうと、明らかに食物連鎖が逆転しているであろう凶悪な肉食獣である

うと分別なく嚙り付いている事であろう。

そして、彼は扉の前に到着した。 いざ目の前に来ると、遠目で見た時よりも濃厚で凶悪さが伝わるような程、頑丈に出来ている扉である。 岩で出来ているが、恐らく核でも打ちこまれない限りはこの扉が破壊される事は無いという考えが一瞬だけ頭をよぎったが、その考えは直ぐに捨て去り、扉の向こう側へ向かう為に更に近づく。 幸いなことに扉は閉まっておらず、子猫の身体を持つ彼ならばなんとか通る事が可能な位、凡そ10？弱の隙間が開いていた。 ある意味で幸運とも取れる事ではあるが、そんな状況は今の彼にはどうでもいい事であり、通る事が出来るのなら通る。 と言う考えしか浮かばない状態であった。

少し狭くはあるが、隙間を難なく通りぬけた彼は小さな部屋へと入った。 先程の部屋とは違い、光る鉱物もなく外への亀裂などもないその部屋は人間の目から見たら暗闇であっただろう。 しかし、猫へと変化した彼の眼は僅かばかりの光により少しずつではあるがこの部屋の全貌を確認できるようになっていた。

凡そ十畳の狭い空間であるそれは、先程のドームよりも明らかに異質であった。 まず、今の岩の扉自体も自然に作り出されたものではないという事は分かる。 幾ら彼が空腹で混乱しているとはいえソレは分かる。 しかし、それ以上にこの部屋は何かがおかしいのだ。

「にに…にに…にににに？（剣…鎧…人間がいたのか？）」

そう、其処には何処の誰が装備していたか分からない剣と鎧が飾られていた。 白銀に輝く鎧、更には金の装飾がなされたおとぎ話に出てくる魔王を打ち滅ぼすとされている『聖剣』を彷彿させるかのような剣… そう言った剣などの武器に関しては全くの素人である彼ではあるが、そのあまりの神聖さに暫し心を奪われ、呆けた表

情でそれらを見つめていた。

時間にして10分程であろうか、彼はふとした拍子に我に返った。確かに空腹ではあるが、それを思い出したためではない。……いや、確かにそれには関係している事ではあるが、ある意味でも自身の五感が鋭くなった為に感じたものだと思う。

「ににに……にに？（甘い……香り？）」

鼻腔から入った匂いは確実に空腹である彼の胃と脳を刺激した。しかし、こんな洞窟の奥深くで何故甘い香りがするのか疑問ではあるみたいだが、そんな事は最重要事項（空腹）に比べたらどうだっていい情報である。

彼は慌てて狭い室内を見回した。十畳という狭い空間の中央には剣と鎧が飾られている。一見するとそれ以外には何も無いように見えるが、それは違うと彼は直ぐに判断した。鎧に隠れて死角になつてはいるが、その先……鎧の後ろ側にはまるで祭壇の様なものがあつた。何を祭っているのか、はたまた何かを封じているなど様々な憶測が脳内に手飛び交うが、其処に彼の目当てのものはあつた。お供え物だろうか？ 祭壇の中央の高さが20？程の壺の様なものから甘い香りは漂ってくる。

「にににに！（食いもんか！）」

彼は先程までのヨロヨロの足から打って変わり力強く地を蹴り、丸でとび跳ねるような勢いで祭壇へと飛び乗った。祭壇の高さは1m以上ある場所にある。しかし、彼は子猫がその高さを一気に登るといふ異常さには運がいいのか悪いのか、この時は気付かなかった。

そんな事は露知らず、彼は躊躇無くその壺の蓋を肉球のある両手で器用に開けた。

「……にに？（……飴？）」

開いたその中には何故かビー玉を思わせるような透きとおった丸い物がゴロゴロと2、30個はあるだろう。……まあ、確かに食べ物には違いない。しかし空腹の彼にとってはある意味で絶望に近いだろう。空腹でやつとの思いで見つけた甘い香りが全て飴玉だとわかったら。そんな中彼はと言うと……

「にににに（取りあえず食うか）」

……まあ、中には例外もいるという事で。彼は壺に頭を勢いよく突っ込むと、勢いよく飴玉をかじり出した。飴玉は意外と脆いみたいで、子猫である彼の顎の力だけで難なく噛み砕かれていく。ただ、飴玉だというのに……甘い香りを発していたというのに……いざ食べてみると全く甘くないのは何故だろう？ と呟いた彼の声は真つ暗な部屋の中で『にー』と可愛らしい鳴き声と共に響いていった。

「味……殆ど無かったじゃねえか」

まあ、ある程度空腹が満たされたから良かったけどよお。そういや、食べてから気が付いたんだが猫って飴玉食べても大丈夫な動物だったか？ ……やめよう、食べて体調を崩したらそこまでだし。

そんなことよりも今は空腹がある程度まで満たされた事を喜ばないよ。

「さて、今からどうするか……ん？」

……あれ？ 何かが変わだ。 だけれど何が変わなんだろう？ 視線の高さは変わっていないし。

自分の前足を見てみると先ほど見た銀色の小さな猫っぽい前足がある。 つまり、身体的なものは変化している訳ではない。

「だったら何が……うん？ 何だろう……話したら途轍もない違和感が…… って俺、言葉話してねえか！？」

違和感の正体には以外と直ぐ気がつく事が出来た。 だって、つい数分前まで『にー』しか話せていなかった筈の俺が気が付いたら言葉を話しているんだぜ？ まあ、どちらかと言うと『にー』って話していた時の方が一番違和感があったもんだから元に戻った為、気がつかなかったのだろう。

しかし、これはこれで弱った。 そもそもその要因が全くもって不明だが、話す猫だなんて明らかに人に見つかったら珍獣扱いされてしまう。 ……いや、今の時代話す猫とか犬とかはテレビに出ている時代だ。 もしかしたら、俺もそんな中の一員に。

「無理だな」

今軽く想像してみたけれど、間違いなく俺みたいに流暢に話す動物がいる筈がない。

しかし、これからの事を考えると頭が痛くなってくるが、こうなってしまうた以上、前向きに考えなければいけない。どんな因果が分からないけれど、話す事が出来るようになった以上、これを頑張ってプラスに働かせるようにするには……それに、ここで泣きわめいた所で元の生活に戻れるかと聞かれたら限りなく皆無だ。

そして、このまま絶望したまま死ぬという最悪な選択肢をチョイスしてしまつたらそれこそ命に対する冒瀆である。

だつたら、この猫(？)ライフを目一杯楽しまなければ損だと思ふ。俺は無理やりにも自分にそう言い聞かせて洞窟の出口を指して歩き出した。

第二幕（後書き）

ありがとうございました。物語を書くにあたり、初めて三人称を行ってみましたが、難しいものですね。どなたか、コツなどを教えて頂けると幸いです。

では、感想&ご意見はいつでも受け付けております。

第三幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第三幕

よお、俺だ。あの飴玉を食ったあと、俺は洞窟の入り口まで戻ったんだ。なんて事はない。ただ、雨が止んだかを確認するためだ。俺は行きの時とは何の変化も無い洞窟を戻って行った。洞窟の隙間から差し込む光は行きの時とは違い少し赤みを帯びている。

日が傾いてきたのだろう。それに、先程まで聞こえた雨の音とかは聞こえなくなっている。

恐らく、先程の雨はゲリラ豪雨と言う奴だったんだ。いやはや、直ぐ止む雨だったら洞窟の入り口で待っていても良かったな。

少し悪態をつきながら俺は歩みを止めることなく洞窟を進んだ。そうして気がつく俺は先程まで居た洞窟の入口に立っていた。

……何故だろう洞窟の最深部から入り口まであまり時間がかからなかった気がする。俺の勘では行きで2時間掛かっていたのに、帰りは30分位に短縮した様な気がする。それに、同じ距離を歩いたのにあまり疲れを感じていない様な……それに、飴玉しか食べしていないのに先程まであった空腹感が嘘のように消え去っている。

まあ、あくまでも俺の感覚だが。

……うん、難しいことを考えるのは後回しにして今は、

「 寝よう」

全てを考えるのは明日だな。うん、そうしよう。もしかしたら無いと思うけれどすべて夢落ちという最初に捨て去った仮説が正しいのかもしれないし。

少し現実逃避をしながら俺は洞窟の入り口で丸くなり、意識を手放すのだった。

「う、うーん……………身体痛てえ」

翌日、俺を起こしたのは誰かの声でも光でもなく体中に広がる痛みであった。まるで筋肉痛を酷くさせたかのような痛みが俺の体を支配する。

ギギギと擬音がつきそうなほど軋む体に鞭を打って無理やり体を起こした。

「……………あれ？　なんだか昨日よりも視点が…高い？」

そのとき、昨日と比べて視点の高さが違うことに気がついた。昨日は地面ギリギリの高さに視点があつたと思うのだが、今日は明らかに昨日よりも視点が高い。大体、自分の部屋のシングルベッドに寝転んだときの視点の高さくらいに感じる。

若干、昨日とは違う様子に疑問を抱きつつも俺は洞窟の外を見た。太陽はすでに昇っており、森の中に木漏れ日が差し込んでいる。どうやら、昨日の雨も夜のうちに上がったみたいだ。

そう結論付けた俺は筋肉痛のような痛みにこらえながらも洞窟の外へと歩き出した。別段、腹が減ったとかは無かった。しかし、その分かなり酷い喉の渴きを覚えたためだ。

それに、残念ながら最後の希望であった夢オチは無くなった。…
…まあ、最初から当てにはしていなかったけれど。

兎に角、この地で暮らしていけないといけなくなったんだ。水場を探しながらこの辺の地理を覚えること位しておかないと最低限生

きていけない。つーか、ついでに猫(?)になつた俺の食料も探しておいたほうがいいのかもれない。

そう結論付けて俺は歩き出したんだ。だけれど、そこで一つ問題が生まれた。さつきも言ったが、何故だか俺の体全身は筋肉痛のような痛みで思うように動かず、一歩一歩出す脚も自分の足ながら少しおぼつかないんだ。

しかし、ここで歩くのを諦めてしまったら必要最低限、生きていくための知識すら得ることができない。明日やればいいと思うかもしれないけれど、昨日みたいに雨が降ったら何日も動けなくなるかもしれない。そうなったら、水には困らないけれど餓死コースまっしぐらだ。流石にそれは御免被りたい。

痛む体に鞭を打ちながら俺は確実に一歩一歩確実に脚を出して前に進む。その度に全身を剣山で刺されるような激痛が襲ってくるが、それは精神力でカバーだ。

もちろん今いた洞窟の場所を忘れないように頭の中でマッピングしておくのも忘れない。こう見えても俺はマッピングとかは得意なほうなんだぜ。

……でも、もし間違えると困るからな。一応その辺に生えている木に傷をつけて……と……ッ!!??

手ごころの木に傷をつけようと俺は爪を立てて木にあてがった。

そしてその瞬間見てしまったんだ。……俺の前足が昨日よりも確実に大きくなっているということに。俺の記憶が正しければ昨日の前足は丸く、子猫のような小さくかわいらしい手だった。しかし、今の俺はどうだ？

「おいおい、明らかに動物園で見たライオンみたく凶暴な前足に変化しているんだけれど……」

毛に覆われた皮膚から嫌な汗が吹き出てくるような感覚が体全身を駆け巡った。

「そう言えば、昨日より視点も高くなっているんだっただよな？ …… たった一晩で成長したっていうのか！？ …… ま、いつか」

うん、子猫のままだと色々大変だし別に問題なくね？ それに人間から猫になるって言うわけのわからん事態に比べたらそれほど驚くようなことじゃないしな。

俺は急激な生長のことについては深く考えることなく、木に傷をつけるべく腕を軽く振るった。

メキ……メキイ……バキバキバキイ

イイ！！！！！！

「……え、何これ怖い」

その瞬間俺は凍りついた。

「木……折れちった」

いやいやいやいや！ 折れちったじゃねーっての！！ なんだあこの木？ もしかして枯れきっていてもものすごく脆い木だったとか？ しかし木の断面図を見ると、途中まで鋭い刃物で切断したかのような滑らかな切り口になっている。

どんなに控えめに考えても誰かが途中までこの木を切ったというのがわかる。

「……なんか、一晩しただけで色々つぶつとみ気味に進化しているなあ」

自分自身に言いしえぬ恐怖を抱きつつ、俺は前足に目を向ける。そこには、相変わらず数分前に確認したとおりの肉食獣を思わせるかのような凶悪な爪がある。

しかし、どんなに考え込んだとしても現状に変化が起きるわけではない。

俺は心のなかで盛大なため息を吐いたのち、再び水場を探すために先程よりも重くなった感じのする前足を動かすのであった。

洞窟から出て一時間程経過しただろうか。今日一日は食糧や水を調達するのに費やすであろうと考えていた俺の予定は早くも良い方に崩れ始めていた。

「うお……コレまた綺麗な湖な事で」

俺の眼前には今迄写真でしか見たことが無い様な綺麗な湖が広がっていた。森が開けたそこは、規模としては野球のドームくらい大きさであろうか。その水は限りなく澄んでいて、淵から湖底をのぞき見る事が出来る程である。そして、中には色とりどりの魚がいるのも確認出来る。

どうやら、此処にいれば飲み水には困らないだろう。魚は……いるのは確認出来るけれど、獲る手段はそのうち考えとしましようかね。

取りあえず、渴いたのを潤す為に俺はさっそく湖の傍まで行き舌を使って器用に水を飲み始めた。何だか普通の水だって言うのに、やけに美味しく感じられる。やっぱり、そのモノに飢えていと得た時の満足感が半端無く大きくなるんだろうな。

勝手に自己解決した俺は、一心不乱に水を口へと運んでいく。そついや知っているか、猫って自分の舌を水面に叩きつけて跳ねた水を加えるんだってさ。前に動物の特番で見たんだよ。それで、俺も試してみたんだけど、身体が猫だからか分かんないけれど、すつごく簡単に出来たんだよね。……うん、軽く人間から遠ざかっている感が否めないけれど俺は気にしないぜ！

口を少し止めて自分の状態に嘆く。しかし、幾ら考えても考えはまとまらず、正に堂々巡りな考えになってしまう。

ふと、湖面に映った自分の姿に目を見張った。毛の色は前足と

同じで銀色一色。耳はピンと立っていて顔の輪郭は猫だけあって、やはり丸っこい様な印象を受ける。

そしてその顔には……

「なんだこれ？ 模様のように見えるけれど……」

丁度、額にあたるところだろうか、ローマ数字が幾つも重なった様な妙な模様になっている。……しかし、模様って言うよりも入れ墨に近いなこの形は。

「つくづくワケのわかんねえ体になってんな」

しかも、この顔の猫って見たことねえんだけれど？ 銀色の毛色をした猫って……灰色なら何種類か知ってただけれどな。あれか、俺が知らない品種か何かか？

ガサガサ……

その時だ、妙な気配を背後から感じたのは。猫になった所為で気配には敏感になってきているみたいで、後ろの妙な気配の様子が手に取るように脳へと伝わってくる。

しかし、俺に対しての敵対心は無いように感じる。って言うか、俺の第六感が正しければ俺には全く気が付いていないと言った感じであろうか。

まるでこの二つの気配が喧嘩しているような……そう、言うのであれば俺は蚊帳の外と言った感じであろうか。まあ、俺に対して不利な状況に働かなければそれで良いんだが、もし俺と言う存在に気がついて危害が加わる様だったらソレはそれで困る。

俺は猫にデフォルトで備わっている隠密スキルを（感覚的に）フル活用してその気配がする方に近づいて行った。

傍まで行くと誰だかわからないが言い争っているように聞こえる。片方は男でもう片方は女であろうか？ って言うか、この姿になつて初めて言葉が通じる相手を見つけたんだけれど！

あ……… だけれど、口論している最中に俺が割り込んだら『何コイツ？ マジKYじゃない？』とか『何だか美味そうな猫だな。よし、今日のランチはコイツに決めた！』とかになつたら最悪じゃないかな？

……… うん、もう少し様子を見るとしよう。 そう結論付けた俺は茂みに身をひそめながら声の主たちが見える位置へと移動した。

「だからいい加減、鬱陶しいって言ってるのよ！！」

「キキキキ〜久々の獲物を取り逃がしてたまる力！」

……… うわ、何このカオス？ 余りの訳のわからん光景に一瞬だけ俺の意識がふゆ〜ちやりんぐわ〜るどしかけたぜ……… 自分で言っていて意味の分からん言葉だけれど。

と、取りあえず俺の目の前に起きている状況について説明しようと思う。

まず女の声の主だ、俺は始め人間だと思っていたんだけど、ソレはテンで違つたみたいだ。 なんと女の声の主は今の俺より小柄な体系の茶色い毛並みをした犬だ。 大体、動物園で見る狸くらいの大きさだと思つてくれて構わない。 …… いやいや、何で犬が喋ってんだよ！？ どのわんわんストーリーだつての！！

……… あ、状況からしてみたら俺も同じか。

少しばかりトリップしていた俺は直ぐ様意識を戻して男の声の主

を見た。

……そんなもって、男の声の主なんだけれど此方は人間か獣かと聞かれたら人間に近いんだが……いや、人間には分類しちやいけないなだけどさ。だって、体長が1m位の小柄な奴で、耳の先っぽが鋭く尖っている。もう既にこの時点で人間では無い。更に目を引くのはつるっばげな頭と人間にしては濃すぎるダークブラウンの体色。そして、真紅に燃える白目の無い目玉、手には刃こぼれしまくりのナイフが一振り……え、どこのゴブリンですか？

どうやら話を聞いていると、こつという流れのようだ。

犬歩く　ゴブリン遭遇　ゴブリン腹減った　お前(犬)頭丸かじり

だなうん。……うん、食物連鎖って素晴らしい。いやいやいや、何だか色々論点がずれまくり立っての！

「だーかーらー！　私は此処で終わるわけにはいかないって言うてんのよ！！　そんなにあたしの相手をしたいなら力づくでそうしなさいよ！！」

ちよ、犬さん！　ソレ死亡フラグDeathよ！？　本当に喰われちまいますよ(食物的な意味で)！？

ゴブリンはともかく、同じ哺乳類として犬さんの無残な姿はみたくないなあ〜　でも、ここで助けに行つて下手すりゃ俺の命も危ないからな……

そんな薄情な事を考えていると、2匹は同時に突っ込んでいた。

犬(?)は自慢の牙を遣い、ゴブリンに噛みつく攻撃を繰り返している。時折、俺ほど鋭くは無いが爪を遣つて引つ掻く攻撃も織り交ぜている。また、軽い身のこなしでゴブリンのナイフを避け

ている。

一方のゴブリンはと言うと、犬の猛攻を避けつつもあの切れ味の悪そうなナイフを振り回して犬に攻撃を与えようとしている。しかし、犬の素早さが勝っているようで、致命傷を与える事が出来ずにいる。寧ろ、あの細い腕や足を犬に噛みつかれてどちらかと言うとゴブリンの方がボロボロになってきている。

どうやら、この勝負は犬の圧勝で終わりそうだ。この先に起こる事を少し予想しつつもこの場から離脱しようとする、ある一点に目を奪われた。

俺が居る場所から2匹が戦っている場所への丁度対角線上に何か動いたように感じたのだ。

始めは気のせいだと思い、少し意識を向けるだけにとどめたが、明らかに犬がゴブリンを追い込むたびにその動いているモノが2匹に近づいてきている。

そして、俺は見てしまったのである。その近づいて来るモノの正体を。

「（　　）　　んな！？　もう一匹ゴブリンがいやがったのか！　…
…と言う事は）」

俺はもう一度戦っている最中の2匹へと視線を向けた。

恐らく、あの犬と戦っているゴブリンは囷なのだろう。そして、

本命は犬が勝利を確信した瞬間に飛び出して一網打尽にする作戦に違いない。……ややこしくなるから犬と戦っている方をゴブリン

A、潜んでいる奴をゴブリンBにしよう。

それにしても悪知恵が働くゴブリンズだ。……いや、生きるために必死になった結果がこうなのだから仕方無いことだと思う。

しかしだ、オメオメと俺が目の前で同じ哺乳類を殺させてたまるかっただ。

その時の俺はさっきまで考えていた『自分の命が云々』と言う事を忘れてしまっていたのは言うまでも無い。

俺は身を潜めているゴ布林Bに意識を集中した。多分、あのゴ布林Bは出ていくタイミングを見計らっているんだ。俺の勘が告げている。犬がゴ布林Aに対して止めを刺す瞬間、犬が勝利を確信した瞬間に事が起きるって……そしてその瞬間は訪れたんだ。

第三幕（後書き）

ありがとうございました。 今話は一人称に戻しました。

確認はしたのですが誤字脱字があると思いますので、見つけれ
方はこっそりと教えて頂けると幸いです。

そして、文章の書き方……これは本当にリハビリな話になっていま
すね。今後も精進しなければ……
感想&ご意見&アドバイスはいつでも受け付けております。ではで
は、次回もよろしく願います

第四幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第四幕

人間は少し無茶をしても……いや、猫は少し無茶をするくらいが丁度いいという事がわかった。

ゴブリンBが犬を襲おうと茂みから飛び出てきた瞬間、俺も同じく茂みから文字通り飛び出した。

犬は突然現れた俺とゴブリンBに驚いていたようだったが、すぐに現状を理解し、たった今相手をしていたゴブリンAの喉に噛み付いていた。

一方のゴブリンAはゴブリンBが現れるのは手はず通りだったみたいだが、突然現れた俺を見て驚愕の表情をした。無理もない、この狩りは失敗〓死を意味している。

そんな中で超イレギュラーな俺が現れたんだからな。

俺は犬等を飛び越えると、同じく飛びあがっているゴブリンBの横っ面にこれでもかかって言う位の本気の猫パンチをお見舞いした。

さて、ここで一つ考えてほしい。つい先ほど俺は木に向かつて軽く腕を振った際、何が起きたのかを。

……まあ、何となくは想像できるよね。そう、俺が腕を本気で振るったためゴブリンBの頭部は、まるでハンバーグを作る時、ミンチの中に手をつ突っ込んだような音と共に文字通り吹き飛んだ。ソレと同時に俺の前足には肉を潰す感覚が伝わってくる。

次の瞬間、真っ赤に塗りつぶされた俺の視界、そしてドサリと音を立てながら地面へと落下していく何か足りないゴブリンBだったモノのなれの果て。

……考えるまでも無く、ゴブリンBが死んだという事は理解出来た。

「以外と軟いかも？」

「キキ!? な、何だお前は！」

俺のつぶやきを無視するかのように犬と対峙していたゴブリンAが俺に向かつて吠える。　どうやら、余りにも急な出来事だった為に、犬も止めを刺し損ねてしまったらしい。

そんな犬は突然の出来事だった為に、今迄対峙していたゴブリンから目を反らして俺の方を目をまん丸にして見ている。

「お取り込み中の所失礼しました。　それでは、続きをどうぞ」

俺はソレだけ言い残すと、その場を後にしようときびきを返した。　そういえば、初めてみたとはいえ、生き物を殺した事に関してはそれ程嫌悪感を示す事が無かったことに俺は内心驚いた。

それ以前に、ゴブリンなんてファンタジーな生物が居るという事実に驚くべきだったのだが、この時の俺にはそんな考えは微塵にも気付く事は無かった。

「キキキ！　ま、待ちやが　」

「待つのはアンタ……だつての!!」

ゴブリンAの怒りに満ちた声と、その直後に犬の声が聞こえ、直後に『ザシュツ!』という何かを貫くかのような生々しい音と、醜い『ギャア!!』という断末魔が同時に聞こえた。　実際に視界に入っていないからどうなったかは予想でしかないが、ソレを俺は敢えて何も触れずに犬達を背にしたまま前に歩きだした。

しかし、水を飲みがてら食糧を探す筈だったのに嫌なもんを見てやっちまったな。　これからは自重しないといけないな、うん。

「ちよつとアンタ！」

まだ5mも歩いていない時、先程の犬が制止を求めするように声を発した。ソレは間違いなく俺に向けての言葉である。しかし、その声は先程ゴブリンAと話していた時とは違い、苛立ちなどは一切含まれていなかった様に感じる。

「何？」

俺はある種の賭けに出た。犬猫と言われると俺が知っている限りでは仲が悪い印象しか持っていない。まあ、例外的に仲良くしている動画はインターネットとかで見ることがあるけれど……

仮にこの犬が俺に対して友好的に接してきた場合、色々この世界の事について聞く事が出来るいいチャンスだと判断したからだ。

俺の予想……と言うよりも確信だけれど、この世界は間違いなく俺がいた世界では無い。だって、喋る犬や猫、はたまたゴブリンなんていうファンタジーに満ち満ちた生物がいるのだ。

事實は小説よりも奇なりということわざがある通り、今俺のいるリアルは間違いなく奇な出来ごとに溢れている。

そんな中、世界を知るなどの情報を抑える事は生きていく上で限りなく有効な手段だ。

少しの間でそう結論付けた俺は、なるべく相手に不信感を与えないように後ろを自然な動作で振り返った。

「ウォ、近ッ！！」

び、ビビったぜ……振り向いた瞬間、俺の眼前には視野全体にどアップで先程の犬の顔が映し出されているのだから。

「……何よ、失礼しちゃうわね」

「いや、誰でも目の前に顔があったらビビるっつの」

犬に対してとはいえ、真っ先に出た言葉が『近ッ』は流石に失礼だったと思う。

俺の対応に少し苛立ちを覚えたのか、犬は俺から少し離れて怒り気味な声を出した。

「まあいいわ。取りあえず、助けてくれた事に関してお礼でも言っつて……ほしいかしら？」

……はい？

「全く何よ？ 急に出てきてゴブリンを仕留めたからって良い気になつてんの？ 私は別に『助けて〜』なんて一言も言っつて無いつての！ あんなのあたしの華麗なるステップで余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）で避けれたわよ！ 全く、これだからケット・シーは嫌なのよね〜恩着せがましいっつて言っつかなんと……」

……何でか分からないけれど、ご立腹のようだし帰ろう。

イキナリそっぽを向きながら訳の分からん言いがかりを付けられた俺の心は一瞬にして、この犬には関わるなと結論を付けた。

その後の俺の行動は早く、直ぐ様犬に背を向けて猫ならではの素早さでその場から立ち去った。

未だに俺がその場から離れていくのに気付かず何かを捲し立てている様子を尻目に俺は一気にその場から離れていく。

遠くなつていく犬の姿が俺には滑稽に映ったが、そんな事を気にせず俺は前へと進み続けた。

途中で漸く俺がその場から居なくなつた事に気が付いたようだが、時は既に遅く、俺の姿は犬からは見えない位置まで移動している。

後ろの方で何かを叫んでいるようだが、俺は敢えて何も聞こえないふりをして走る足を止めなかった。

……あ、やつべ犬つて確か鼻がきくんだよな？ だったら、俺の匂いを消しておかないと。

あのあと、俺はワザワザ遠回りをして先程喉を潤していた湖まできた。

そして躊躇なく、湖にダイブを決め込んだ。一瞬、猫つて見ずに濡れるのは苦手じゃないのか？ と言う疑問が頭をよぎつたがいざ入つてみると水は冷たく、プールに入っているような感じがした。

こんな水浴びで犬の嗅覚を誤魔化せるのか心配だったが、モノは試しともことわざで言うからやるだけやつてみよう。

……しかし、さっき犬が言っていた言葉が気になるな。確か『ケット・シー』だったか？ あんまり本は読まないけれど、ゲームとかの雑魚敵とかにそういった名前の魔物モンスターがいたような感じがしたよな……

でもつて、あの犬は俺に向かつてケット・シーだつてたんだよな？ ……もしかして、猫じゃなくて実は魔物モンスターフラグが成立した？

……ま、難しい事はあまり深く考えないでおこう。折角貰った

セカンドライフだし、長く生きていれば自分が何者になったか位は分かるだろう。

俺はそう結論付けると湖に潜った。特に意味は無いが、何となく泳いでみたくなつたからだ。通常、猫は自分から進んで水に入る事は無い。まあ、例外として結構前に見たテレビではトラが水浴びをしている姿が映し出されていたが、ソレは本当に例外中の例外だ。最も、身体は泳ぐことに特化していないから泳ぎにくいったらありやしないけれど。

しかし、今の俺はそれを色々と無視している状況だったりする。全く、身体能力が猫以上になっていたり、4足歩行をしても違和感を感じなかったり、水に入っても大丈夫だし、極めつけは話す猫だと？

何処まで俺の体は魔改造されているんだつての。

俺は水中でそんな事を考えていた。そんな折、ふと浅い湖底に何か動く影を見つけた。一瞬「魚か？」と思つたけれど、直ぐ様それは違う事が分かった。だって俺の目に入ってきたのは……

「(蟹……沢蟹かな？ でも、少し大きい様な……)」

俺が見たものは紛れもなく蟹だった。決してザリガニやエビでは無い、沢蟹だ。しかし、そのサイズに俺は少し驚いた。あまり蟹には詳しくないし、知っていると言つても小さい頃キャンプ場の近くにあつた川で遊んでいた時に見た蟹のイメージが強すぎて、沢蟹「小さい」という図式を成り立たせていた。

しかし、今俺の目の前にいるかにはどうだろうか？ 俺に背を向けているため此方には気が付いていないであろうかには明らかに30?を超えているように見える。爪に至っては片方が胴体と同じ位巨大なのである。

その瞬間だ、俺が今迄押さえていた空腹を感じたのは。腹の虫がまるで自己主張するかのようにくぐもつた音を立てている。

そんな俺が目の中の蟹を『食べる』と言う結論付けるのに時間は必要なかった。

魚を取るのには難しそうでも、蟹ならばいくらか勝機はある。それに、湖底とはいえ、大体深さが50?程の浅い所だ。きっと頑張れば俺でもあの蟹を取る事は出来ると思う。

ただ、注意しないといけないのは明らかに凶悪そうなハサミだけだ。

その時、俺は犬に会う前に木を切り払う程の鋭さがある自身の爪の存在を思い出した。

なんて事は無い、例えば水中だとしてもこの体は色々とおかしな性能を持っている。だったら、ソレをフルに活用させて貰おうじゃないか。

そうと決めた俺の行動は早かった。なるべく気付かれないうちに俺は一度湖面にあがり、空気を吸った後もう一度潜水をした。そして、ゆっくりと湖面を這うようにしながら蟹の背後へと近づいた。

相変わらず蟹は俺に背を向けたままである。

これは幸いと、俺は迷わずに右前足を振りかぶり……

水の抵抗はあったが俺のこの爪は難なく蟹の右側にある巨大なハサミを難なく、特に抵抗を感じるわけでもなく、まるで飴でも斬るかのように俺の爪はハサミを切り落とすとした

流石に蟹も俺の奇襲に驚いたらしい。しかも、武器でもある巨大なハサミを切り落とされてしまったんだ。残念ながら抗う術は無いと判断したのか、一度俺の姿を視認した後蟹ならではの横歩きで俺から逃げようとした。

しかし、そうは問屋が卸してたまるかっつてんだ！折角見つけた食べられそうな蟹（食材）を前にして逃がしてなるものか！

俺も当然の如く蟹を追う、先程切り落としたハサミを啜えた状態で追いかけてくる。

しかし、フィールドは水中。どれだけ身体にスペックの差があったとしても、この場は蟹の庭と言っても良い場所だ。

結果的に俺は巨大蟹に逃げられてしまった。本当にあつという間に消え去ったとはこの事だと思う位一気に差を広げられたんだ。

最も、これが陸上だったらどうなるか分からないし、俺も息が続かなかったというもある。

俺は渋々蟹から切り取った巨大なハサミで我慢することにした。

まあ、我慢と言いながらもこのハサミ自体先程の蟹の胴体と殆どサイズが同じくらいなので、満足する事は出来ると思うけれど……そう考えながら俺は蟹のハサミを啜えたまま陸に上がった。身体を振りながらまとわりついてくる水を振り払った。

さてさて、どうやってこのハサミを食べるとするかな……蟹のハサミを地面に置きどうやって食べるのかを俺は思索した。

猫になったんだから多分、生でも食べる事は出来ると思う。だけれど、中々気が進まない。いや、刺身で食べる分には抵抗は無いけれど……なるべく初めて食べるんだから火くらいは通したいんだけど……

「ハア……」

どうするべきかを考えながら俺は軽く眼を瞑りながらため息をついた。……ん？ 何だか少しだけ辺りの気温が上がった様な気が……

俺はゆっくりと双眼を開いた。そこには……

「（パチパチパチ）……何か木が燃えているんですけれど？」

一瞬、俺の目がおかしくなったのかと思った。だって、俺の目の前にある木に火が付いているのだから……だって、火の気とか全くなかったんだぜ？

なんだってイキナリ燃えて……いやいや、それどころじゃねえだろうが！

この火を早く消さないと山火事ってレベルじゃなくなるでしょうが！！

「ど、どうしよう！？ とと兎に角、水〜それよか氷〜」

その直後、今度は先程までであった木が燃える音が消えて何だか辺りが気温が急に下がったように感じる。

ふと、今しがた燃えていた木に目をやると……

「……………今度は凍っているんですけれど？」

訳が分からなかった。だって、急に発火現象が起きたり、その直後に燃えていた木が冬でもないのにかちんこちに凍っているのだから……

もしかして、この世界ではこういう不思議現象が頻繁に起きているのかとさえ思った。しかし、現実的に考えて燃える事に関しては起きる可能性はあるけれど、流石に寒くも無いのに急に凍るなんて流石にある筈がない。

きっと、何かがあるに違いない。

その時だ、先程までなりを潜めていた俺の胃袋が『腹減った』と言わんばかりに自己主張を始めたのは。……………まあ、難しい事は後にして取りあえず今は食べる事を優先にした方が良くかもしれない。ふと、足元に転がっている蟹のハサミに目をやった。そこには

先程の発火現象の影響であろうか、凄く良い赤色に変色したハサミが転がっている。そして、俺は躊躇せずそのハサミに殻ごとかぶりついた。

行儀が悪いつて言われても腹が減っていたんだから仕方ないじゃん。それに、色々と強化されているみたいなのこの体からしてみたらこんな殻を噛み切る事くらい難しい事じゃないと判断したからだ。まあ、結果的に殻は問題なく食べる事が出来た。それに、身の方もギツシリと詰まっついていて味も濃厚で凄く美味しかった。しかし、問題が一つ……

「……猫だからな、猫舌なのはデフォルトな訳ですか」

以前は大丈夫だった熱い物を食べる事が出来なくなっただくらいであろうか。我慢すれば食べれない事は無いけれど、結構舌が痛い位に火傷をしてしまいました。

蟹の火の入りはかなり良かったみたいだけれど、こういった弊害があるなんて予想外だったな。

俺は仕方なく、早く覚めるように食べかけの蟹のハサミに向かって息を吹き込んだ。しかし、次の瞬間……

「……凍った。蟹のハサミが？」

俺の眼前には先程の木と同様に……まるで冷凍庫にほおり込んでいたかのようにカチンコチンに凍った蟹のハサミがあったのだった

「……え、俺の所為？」

取りあえず、呟かすにはいられなかった。

第四幕（後書き）

ありがとうございました。

最後の方がグダグダになってしまいました。

そして、敢えて主人公猫をケット・シーと表記したのですが、二足歩行では歩く事はありません。

この辺は追々説明を入れていこうかと思えます。

ではであり、これからも応援よろしく願います。

第五幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第五幕

あの時、犬が俺に向かってケット・シーと呼んでいる時から何かがおかしいと思っていたんだ。

それに、唯の猫が腕を薙ぎ払っただけで木を切り倒したり、水中に潜って活動したりして……しかも極めつけは息を吹きかけただけで蟹のハサミが氷結ですよ？　こりゃあ、さつき木を燃やしたのも俺がやったとみて間違いないかもしれない。

やあ、自分が唯の猫ではないと気付き始めた俺だ。

蟹のハサミをカチンコチンに凍らせてしまった俺は、自分自身のことについて考えたところ、俺はただの猫ではないという結論に達した。あ、蟹のハサミは凍ったままおいしく頂きました。まあ、猫舌だから熱くなければ何でも食べられるみたいですよ。

しかしあれだね、ゴブリンがいる世界だ、猫が火を吹いたり物を凍らせてもおかしくないのかもしれない。

……なんだかRPGに出てくる魔物を連想させるよね？

つか、確実に勇者に倒されるルートしか考えられない自分が悲し過ぎる！……考えるのはやめよう。

そんなこんなで、だいぶ話を戻すけれど蟹のハサミを食べて腹もふくれて、水で体を洗った俺は今後の事について考えてみる事にした。

取りあえずは、寝るのは今朝まで使っていた洞窟で良いと思う。

食べ物だって火を吹いたり物を凍らせる事が出来るのだから、工夫すれば何とかなる筈だ。

……え、特に問題なくね？　まあしいて挙げるのなら、凶悪な肉食獣にあって俺が御飯にならないように注意をするだけでして

その時だ、聴力が人間の数十倍になった猫になったからこそ感じられるほど小さくではあるが背後の湖から水が跳ねる様な音が聞こえたのは。その刹那、今まで感じた事がない様な悪寒が身体全身を駆け巡った。

ソレが何かと考える前にその場からサイドステップの要領で一気に横へと跳んだ。一瞬、風を切るような音が俺の耳に入ってきた。地面に着地した瞬間、俺は今まで自分が立っていた場所へと眼をやった。そこには……

『シューシュー』

俺が立っていた場所にはファンタジーな漫画やアニメでしか見た事がない様な金属製の棒が……水に濡れたソレは金属独特の茶色の錆も目立つが、生き物を殺す位造作もないであろう。

……ぶっちゃけ、剣があります。両刃剣ってやつですね。そして、その持ち主は身体全身を緑色の鱗と皮で覆われており、造形は大きなトカゲが二足歩行でもしている様なものである。

そして、何を考えているのか分からない顔が不気味さを醸し出し、瞳も縦に割れ不気味さを助長させている感じがする。……はい、どこからどう見てもイメージ上はリザードマンにしか見えません。ここにもファンタジックな生物を発見してしまっただぜ……

リザードマン（仮）は耳障りな空気が抜ける音と共に口から二又に分かれた舌をチロチロと出し入れしており、何となく俺に対して威嚇しているようにも感じられた。

「って、考えたくないけれどもしかして捕食対象認定ですか!？」

その瞬間、リザードマン（仮）が剣を再び振り上げて俺の方を向いた。この場に居るのは危険だと俺は瞬時に判断し、バックステップの要領でリザードマン（仮）と距離を取った。

相変わらずリザードマン（仮）は何を考えているのか分からない表情で舌をチロチロ出し入れしながら俺の方を見ている。

何が何でもこの場から逃げなくては……つい先ほどゴブリンを一体たおしたとはいえ、あの時は滅茶苦茶奇襲だったし、しかも今回の相手は剣まで持っている。

……本当の事を言うと、俺の内心は恐怖でいっぱいだったりする。こういつ時って誰かが書いた小説とかだと厨二らしく武器にもめげずに突っ込んでいくのがセオリーかもしれないけれど、生憎と俺はそこまでいっちゃっている訳ではない。

武器なんて持った事ないし、ましてや剣を持っている人外に突っ込んでいく勇氣も度胸もありはしない。

さっきのゴブリンの時の俺は絶対にどこかおかしかったからノーカーンだ。

いい感じでテンパっていると、しびれを切らせたのかりザードマン（仮）が地を蹴り飛びかかりながら俺に向かって剣を縦に振るってきた。

しかし、逃げようにも俺の足は恐怖で地面に縫い付けられたように動かない。……え？ コレって何て死亡フラグですか？

しかし、身体は動かないが何故だか考える事に関しては何時もよりも冷静に出来た。多分、色々と非常識的な事を目の当たりにしたせいでおかしな耐性が付いたのだろう。

兎に角、今は俺が生き抜く事を考えなければ……逃げる事が出来そうにない以上、このリザードマン（仮）を如何にか説得して俺に攻撃させないように誘導を……

そして、正に剣が振り下ろされる瞬間、俺は賭けに出た。

「ス、ストップだったの……！」

一瞬、この世界の生き物に英語が通じるのか不安だったが俺の発した言葉によってなのかりザードマン（仮）はその剣先を俺の鼻元でピタリと止めた。

やはり、顔には表情が現われておらず本当に怖い。しかし、折角出来たかもしれないチャンスなんだから棒にふるわけにもいかない。

「か、勝手に湖に入ったのは謝る。お、俺も腹が減っていてどうにも我慢が出来なくてな。で、でも生き物を殺したとかはしていないし……まあ、蟹のハサミは頂いたんだけど……い、いや、こちらら腹が減っていて見逃して貰えると嬉しかったりするなあ……なんて」

言い切ってから考えたらかなり自分勝手な物言いだったかもしれない。それに、この世界に来て犬とゴブリンには話を通じたけれど果たしてリザードマン（仮）に俺の話している言葉が通じているのだろうか？

俺が言いきっても尚、何も話さないリザードマン（仮）の様子に段々と俺は不安に駆られてきた。

そんな沈黙が数秒続いた後、リザードマン（仮）はゆっくりと口を開いた。

「……お前は我を討伐しに来たのではないのか？」

「……はい？　なんで俺が見ず知らずのアンタを倒さないといけないんだよ？　さっきも言ったけれど俺は腹が減ったからここに来ただ

けで……ソレに、もう腹が膨れたから自分の寢床に戻る所だよ」

予想外にもこのリザードマン（仮）は俺が自分を狩りに来た者だ
と思い、襲ってきたようだ。

それならば、幾分か俺が生き残る術が出来るかもしれない。

そしてリザードマン（仮）は俺の目の前に構えていた剣を治めると無表情ばりに申し訳なさそうな声で俺に話しかけてきた。

「すまなんだ、最近どうにも血の気の多い輩ばかり相手にしていた
ものでな……お主も同じ気質の奴かと……」

少し驚いた。背は大体150?くらいのリザードマン（仮）が自分よりも小さい俺に向かって頭を下げるなんて……

でも、どうやら俺が殺されるという最悪の事態は待逃れたらしい。
それに、このリザードマン（仮）って何だか話してみると結構いい奴っぽいな。

「いや、気にしなくて良いよ、イキナリ来た俺も悪かったしな」

「うむ、感謝するぞ。 おお、そうだ迷惑をかけた礼がしたい。
何か我に出来る事があつたら言つてはくれぬか？」

おお！？ 渡りに船とは正にこの事だぜ！ まさかここに来てお
助けキャラが登場するなんて……それに、やっぱりこのリザードマ
ン（仮）は良い奴っぽいな。 いや、見た目は結構あれだけれど見
た目と中身は比例しないもんだな、ウン。

「それならさ、これからお腹がへつたらこの湖に来て蟹とかもらい
たいんだけど……いいかな？」

「おお、それならば問題は無いぞ。 なんなら我が魚などを獲って届けるが？」

おおお！？ 更に良い事づくし！ 　　ってかマジでこのリザードマン（仮）さん良い奴じゃなか！

「悪い、頼んでも良いかな？」

「ハハハ、ソレ位の事は気にするでないぞ。 　　どうせこの湖には我くらいしか知能を持つ魔物は居らぬのでな。 　　お主はケット・シーであろう？ 　　一人で暮らして居るのか？」

「まあね。 　　……ところで一つ聞きたいんだけど、俺ってケット・シーなの？ 　　ってか魔物って何？ 　　そもそも、ここどこ？」

何だかりザードマン（仮）さんが良い奴っぽいので俺は取りあえず、今必要な情報を聞きまくった。

何で人間だったのに猫になっっているのかも聞きたかったけれど、ソレについてはリザードマン（仮）さんは間違いなく答えるのが難しいと思ったので、伏せておいた。

「ぬ？ 　　どうしたのだ、お主はケット・シーであろう？ 　　親御殿からは習わなかったのか？」

「うーん……それがさ、昨日までは話す事も出来ない猫でさ、って言うか昨日以前の記憶云々も無くてさ……ソレが今日になったら体はでかくなっているわ、話せるようになってるわ、力が半端無く強くなっているわでさ」

まあ嘘は言っていないよね嘘は……
そして、俺の言葉にリザードマン（仮）さんは少し考え込むように眼を閉じた。

「……恐らく、身体が巨大化し、力が強くなった云々に関しては昨晚の内に進化したのであろう」

……はい？ 進化ってあの、

「昨日まで話せなかったのであろう？ まあ、記憶云々は分からぬが何らかのショックで消し飛んだか……まあ、ソレは重要なことではない。昨日、何か変わったことをせんかったか？」

「変わった事って……まあ、洞窟に入った位で……」

そんな俺の言葉を聞いて、リザードマン（仮）さんは無表情ながらも少し驚いたような顔をした。

「ほお、お主『試練の洞窟』に入ったのか？」

試練の洞窟？ 何だろう、凄く興味を注がれてしまうような名前が出ただけけれど。

「『試練の洞窟』とはな、そのモノが心より求めるモノを具現化すると言われている洞窟だ。しかし、邪な想いよこしまなを持っている者が入ると、直ぐ様入口に逆戻りと言う奇妙な洞窟でな」

邪な想いって……俺はただ単に腹が減ったもんで、何か食べる物はないかと入っただけであって……それに、俺が思い描いていた食べ物は無かったんだぜ？ あったのは見たことも無い飴玉があった

だけで……

「でも、最深部にあつたのって変な飴玉が数十粒だけだぜ？ まあ、全部食べたならそれなりに腹が膨れたけれど……」

「飴玉……なんだそれは？」

え、飴玉が通じないの？ 英語が通じたのに何で飴玉が通じないんだよ。

俺は少し苦笑いをして、どういふ風に説明すればいいのかを考えた。

「えつとな……まんまるで、口に入れると甘い食べ物だよ」

「丸くて甘い物……それは、透明であつたか？」

何か思い当たるものがある様で、リザードマン（仮）さんは俺にそう聞いてきた。

「おう、でもな甘い匂いだったのに実際に食べてみると全く甘くねえんだぜ？ 全く、詐欺だよなあ」

「ふむ……詐欺が何かは分からぬが」

いつの間にか剣を腰に巻かれていたベルトに差し込んだリザードマン（仮）さんは手を顎に当て何かを考えるようなそぶりを見せながら話し始めた。

「お主が食べたソレは……おそらく『進化の実』だな」

「……何だか、また新しい単語を聞いた。その進化のなんちゃらって何？」

「うぬ、進化の実とは読んで字の如く進化を促進させるための実だな。その実は甘い匂いを漂わせるが無味だとかなんとか……まあ、他にも『成長の実』等と呼ばれる事もあるがな。しかし、お主はついておるな。今の時世に大量の進化の実に巡り合うとはな」

……まあ、ようはその『進化の実』って奴のお陰で話せるようになったし、力もついたって言う事か？

それって、どんなRPGだよ。

「しかし、ソレを数十個食べたと言っておったな？ どうりでだ、お主のレベルがおかしなことになっておる訳だ」

レベルねえ……それなら大体分かる。多分、俺の強さを数値化したもんだろ？ あ、でも何で俺を見ただけで分かるんだろう？

「お主の顔を見るとレベルと言う言葉は分かるが、何故見ただけで分かるのか？ と言う事でも考えて居るのである」

うへえ、何故分かったし！？

「魔物にはレベルが存在してある。表示される部位は違いますがお主の場合は額にソレが現われて居るようだ。因みに、我の場合は……ホレ、この通り右肩に刻印されておるわ」

そう言ってリザードマン（仮）さんは右肩が俺に見えるように腰をかがめた。

……おお、本当だ、緑色の鱗に何だか入れ墨みたいなものが彫っ

てある。……えっと、縦線が5本か。

あれ？ でもさつき自分の顔を見たけれど、俺の額って訳の分かんない入れ墨が模様のように乱雑していた気がするんだけど？

リザードマン（仮）さんの言う分にはソレが俺のレベルらしいんだが……

「我は見ているとおりのレベル5だ。しかし、お主はケット・シーであるにもかかわらず少なくともレベルが30は超えておるな」

……え、ソレってなんてチート？

リザードマン（仮）さんに冷静に返され少し現実放棄したくなったりした今日この頃である。

「……ふむ、まあ難しいことは考えなくともよい。様は、お主は望まぬままに強くなってしまっただけだ。さて、ココはどこかという問いだが」

そこまで言っただけでリザードマン（仮）さんは開いていた口を閉ざした。

一体どうしたというのだろうか？

そして、リザードマン（仮）さんはゆっくりと空を仰ぎ見て、ゆっくりと口を開いた。

「この地は『オリジン』、別名『始まりの地』とも言われている地だ」

「オリジン……ねえ、えらくファンタジックな名称なこと」

「『ふあんたじつく』というのは何かは知らぬが、お主が何も知らぬならちよつど良い。お主、我の仲間になれ」

そして、これが人間から遠くはなれた種族に生まれ変わった俺の人生の始まりになるのだ……

第五幕（後書き）

ありがとうございました。

かなり無理矢理な話になっているのですが、ご了承ください。
試練の洞窟に関する謎は後々……そして、レベルの概念も後々……
何だか後々ばかりになってしまいました。

感想&ご意見&アドバイスはいつでも受け付けております。ではでは、次回もよろしく願います。

第六幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第六幕

何やら面倒くさい事になってきたみたいだ。

やあ、いきなりリザードマンさんに仲間になれと言われた元人間、現ケットシーの俺です。

リザードマンさんによると、このオリジンは幾つかの群れが支配している地域のようでした、なんとこのリザードマンさんは湖周辺を支配しているリーダー的存在の様です！ ビックリだよな？

そもそも、このオリジンには下級魔物しか存在しておらず、レベル5のリザードマンさんは結構上位の魔物に分類されているみたいだ。……レベルが30と思われる俺って此処にいて良いのか果てしなく不安に思ってしまったぜ。

しかし、リザードマンさんが俺を仲間になりたいと思ったのは決して俺のレベルが高いからではないのだ。曰く、自分の仲間達が人間の冒険者たちに狩られたり、より自身のレベルを上げるためにほかの大陸へと向かったために段々と仲間が減っていき、気が付いたら知能を持つ魔物がリザードマンさん一体になってしまった為らしい。

しかも、最近では縄張り争い等も激化しているみたいで、今まではリザードマンさん一体でも如何にかなっていたみたいだが、今後は分からないそうだ。

その話を聞いて、俺はリザードマンさんと会った瞬間に敵意を向けられた理由も理解した。如何やら、俺は縄張りを荒らしにきた魔物と判断されたみたいだ。

まあ、そんな理由があるのなら襲われても仕方ないかもしれないな。

「という訳で、どうだ？ 仲間になってはくれぬか？」

リザードマンさんは今この場での返答を求めているみたいだ。

仲間になるメリットを少し考えると、食料確保のパイプができるというのはおおきい。しかも、特定の団体に所属しておけば、何か有事が起きた際は、ある程度の擁護を期待してもいいかもしれない。

更に、この世界で生きるにあたっての常識諸々をリザードマンさんに教えてもらえる。

反対にデメリットは、自由に動く事が制限される可能性が高い、縄張り争いに間違いなく巻き込まれる。ってところか？

しかし、自由に動けないつつても、元々ここには詳しくないから身の振り方を覚える間は間違いなくリザードマンさんにお世話になるんだから問題にはならない。

それに、縄張り争い……さっきのゴブリンみたいに生き物を倒すのは気が引けるけれど、リザードマンさん曰く俺のレベルはこの地では最強レベルに近いみたいなので、戦いになる以前に相手側が仕掛けてくる事が無い……つまりは案山子カカシになって周りの勢力からの牽制になればいいのだから、これも問題にはなりにくいかもしれない。

つまるところ、果てしなくメリットが大きくてデメリットが少ないと判断できるわけか。

「……ま、これから魚などを頂けるんなら是非とも仲間になりたいんだけど……それに、俺ってはこの辺に知り合いもないし」

結論として、俺はリザードマンさんの仲間になる事に決めた。

メリット、デメリット等もあるが、少しの間ながらリザードマンさんが結構いい奴ってわかったのも大きな要因だ。

俺が仲間になるといふ考えを出すと、リザードマンさんはあまり変化は見られないが無表情っぽい顔ながらも少し嬉しそうな表情を見せた気がした。

自分以外に知能がある魔物が居なくて話し相手もおらず、少しさみしかったと後に語ってくれた。

「そうか、ソレは良かった。……おおそう言えば名乗っておらんかったな、我はリザードマンのルジーナ。ルジーナと呼んでくれて構わぬ、これから宜しく頼むぞ」

あっさりとした俺に動じもせず、リザードマンさん改めルジーナさんは先程まで剣を握っていた右手を俺に差し出した。感じとしては握手と同じだろう。

しかし、ルジーナって……女性みたいな名前じゃね？

「むう……少し失礼であるぞ。我はこう見えても雌だ！」

おっと、考えている事が口から出ていたみたいだな……って女だったの!?

話し方とか男っぽかったし、声のトーンとかも結構低めだったからてつきり男だったとばかり思っていたぜ……いやはや、ソレは悪い事をしたもんだ。

「すみませんでした、それで俺はケットシーで？ 名前が……名前が……何だっけ？」

「ぬ？ どうしたのだ？」

すこしルジーナさんが手を出したまま怪訝そうな顔をして俺の方を見てきた。でも、おっかしーな。

俺の名前だよな……えつとえと……あれ、何だったけ？

……な、何でですか！？ 大学の講義の様子とかゲームの攻略法とか初期のロツ マンのパスワードとか復活の呪文なら思い出せるのに何で忘れる筈のない自分の名前が思い出せないの！？

いや落ち着け俺、こういう時は息を整えるんだ〜ヒツヒツフ〜ヒツヒツフ〜……ってこれはラマーズ法じゃ！ ベタバタなボケかまさんでもよかー！

……うん、少しとりみだしたな。でも、おかし〜な……自分の名前がきれいさっぱり思い出せん。

「名前……わかんねえ」

「名が……まあ、名とは自身を現す固有名詞だ。それほど重要視せずに自身で考えてみるのも一考ではないか？」

うわ〜お、途轍もなく投げやりな発言だぜ。でも、こんなにあっけらかんと言うのってやっぱり種族によって違うのかな？

いや、そもそもケットシーになった俺に前世での人間の名前って言うのもおかしいかな？ だったら、自分で考えるのもまたルジーナさんの言うとおり一考かもしれないけれど……

「因みに、ルジーナさんは名前ってどうされたんですか？」

「我か？ 我は元服する時に我自身で考えた」

元服とかカツコいいな……いやいや、そうではなくてだな。で

も、自分で考えたんだ……っていつか、リザードマンに元服なんてあるんだ。

いっその事、第二の人生の名前を自分で決めるって言うのも面白いかもしれないな。まあ、根本的に自分の名前が思い出せないから仕方ないんだけど……

そういや、ルジーナさんって何歳なんだろう？ ……やめとこ、リザードマンとはいえ女性に年齢を聞くのはマナー違反だな、うん。

そんな事を考えると同時に自分の名前をどうするか俺は考えた。ここで余りにもカッコよすぎる名前とかにしても、後々名前負けしたら困るし、かと言ってありきたりすぎる名前だと面白味も無いし。

自分の名前を考えていた俺はふと、ケットシーになった自分の足へと眼を向けた。銀色の毛並みが僅かにだが濡れ、ソレが太陽に反射してキラキラと輝いている。

ああ、さっきまで水に入っていたからなとつぶやいた時に、俺はハッと閃いた。そのまんまじゃんと突っ込まれること請け合いだが、ある意味で今の俺にはぴったりの名前かもしれない。

その名前は……

「『ギン』……うん、俺の名前はギン。俺が決めた今決めた。……どうよ、この名前？」

俺は片方の口角をグイッと引き上げながら、軽く笑みをつくるようにしてルジーナさんを見た。

「ギンか……自身の毛色から取ったのだな？ 良い名ではないのか、ではギンよこれからよろしく頼むぞ」

そして、俺とルジーナさんは固く握手を交わした。といっても、俺は握る事が難しい足の構造をしているので、ルジーナさんが握っただけなんだがね。

と、まあここで終われば『そっか、頑張れ』ってな感じで終わるんだけど、ここで少しばかり予想外なことが起きた。

「漸く見つけたわよケットシー！ アンタ、私に黙ってなに勝手にどっか行ってんのよー！」

何やら、すごい形相をした先程の犬がこの少し和やかな場をぶち

壊しながら乱入して来たのだから。

……今日の教訓。

『一難去つてまた一難』という諺ことわざは以外とバカにならない。

第六幕（後書き）

ありがとうございました。

かなりグダグダ感が漂う回になってしまいましたが、ご了承ください。
い。

リザードマンの名前に関しては察しの良い方ならば何となくわかる
仕様となっております。

もし、わかった場合はコッソリと紙に書いてゴミ箱へポイしてくだ
さいね。

感想&ご意見&アドバイスはいつでも受け付けております。ではで
は、次回もよろしく願います。

第七幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第七幕

「あのさ……取りあえず話し合わない？」

「うっさい黙れ！」

「ギン、少し黙ってもらえぬか？」

「ああ、気が付いたらケツトシーになってリザードマンのルジーナさんと仲間になりたてはやほやの俺改めてギンだよ。」

「今俺の前ではルジーナさんと雌の犬が激しく言い合っている最中なんだ。両者ともに、牙を光らせたり、眼光を鋭くしてなど、一触即発の状況だったりする。」

「……え？ いきなりすぎて分からないって？ 大丈夫、俺もどうしてこんな状況になったかは……何となくわかるね。」

「だったら説明しろってか？ まあ、そんな難しい話じゃないんだけれど……取りあえずは、回想シーンへ」

「 漸く見つけたわよケツトシー！ アンタ、私に黙ってなに勝手にどっか行ってんのよ！！！」

「 事の始まりは、ギンが一匹の犬(?)を助け出したことから始まった。彼は何も考えずに手を貸してしまったようではあるが、彼女にとってはそうも言っていられない状況なのだ。」

彼女のレベルはこの地では決して低くは無いが、この場に
いる3体の魔物の中で最も低いレベル3だ。

最も、彼女はその事を知る由も無いのだが……しかし、そのレベ
ルという概念があるからこそ、彼女はギンに対して憤怒していた。

そもそも、ケットシーという種族は元々が非力な種族であり、と
てもではないが単独でゴブリンを討伐するなんてまねは出来ないの
だ。

しかし、目の前にいるギンは不意打ちとはいえ、ソレをこともな
げに前足を少し振るっただけで倒してしまった。

そう、簡単に言えば彼女は自分よりもレベルの低い種族が自分よ
りも簡単にゴブリンを仕留めてしまったという事実に対して怒って
いたのだ。

至極簡単に言ってしまうば……

「なに、私より弱いくせしてしゃしゃり出てきてんのよアンタは！
！」

……と、言うことである。

この一方的にも聞こえる物言いにに対して当のギンは出来るだけ穩
便に済ませようと考えていた。確かに、一方的な感じのする物言
いに聞こえるが自分が余計な事をしたのは事実であり、通常ならば
アレは放置するというのがこの世界での常識なのかもしれないと認
識したからだ。

なので、この場で自分が謝罪をすれば事は簡単に済むと踏んでい
た。しかし、それに対して納得できない者がこの場に一体だけ存
在した。

「ふむ、そう言うのであればお主はギンより強いのか？」

つい先ほどギンの仲間となったばかりのリザードマン改めルジーナその人であった。

彼女とて仲間になったとはいえ、当初はギンの問題にあまり深入りしないでおこうという考えであった。

だからこそ、今現れた犬(?)には自分の縄張りに入ったことに關して追求をしなかったし、追い出そうともしなかった。

しかし、寛大な彼女にも許容できないことを犬(?)は口にしてしまった。

リザードマンは通常、十数体の群れで生活するのが常である。仲間がいなくなった彼女は例外中の例外ではあるが。

更には仲間意識というものが強く、仲間の侮辱は自分の侮辱ともとってしまう種族なのだ。

そんなおり、種族が違うとはいえ彼女にとっての唯一の仲間となったギンに対しての侮辱ともとれる発言にはさすがの彼女も黙っていることはできなかった。

「誰よ、アンタ？」

まるで、今ルジーナの存在に気が付いたといわんばかりに振り向く犬(?)。

勿論、ルジーナは半ば無視されている状況で面白くないし、何よりも他人を見下しているその目が気に入らなかった。

「我はお前が『弱い』などとのたうち回っておるギンの仲間だが何か？」

「へえ〜……リザードマンだっていうのにケットシーなんかと仲良くしてるんだ。 バッカじゃないの？」

その瞬間、ギンの耳には間違いなく切れてはいけない『何か』がキレてしまったような音がした。

「それに、私がそのケットシーより強いかって？ そんなの当たり前じゃない！ この世界にケットシーよりも弱いウルフがいるっていうわけよ！……」

「ほお、ウルフだったのか？ 悪いな、あまりにも大きさといい器量といい『小物』染みていたのでな、てっきり我はそこいらの人間に飼われている犬と思っていたようだ」

ハツハツハと悪びれた様子もなく、むしろ挑発せんとばかりな発言をしたルジーナ。すでにギンは、この場の空気がいかに重たくなっていると悟って一歩下がって事の顛末を見守っている。

一方のメスのウルフは明らかな挑発と分かっているながらも、自身を侮辱されていると悟るや否や猛烈に反撃に出た。

「はん！ この馬の骨……ああ、ごめんなさいね『猫の骨』とつるんでいる『トカゲモドキ』に種族を見分けるなんて頭がないわねえ？ ごめんなさいね〜気がきかなくて！」

明らかに一触即発の状態である。そして、この不毛ともとれるやり取りを経て……

「ガルルルルルル……」

「シューシュー……」

「……今に至るわけと」

なぜに、話の中心人物の俺をおいてけぼりにしながら自分達で話を進めているのでしょうか？

色々な意味でめまいを憶えたが、今はそれどころではない。とにもかくにも二人の暴走を止めなければいけない。

「はん、そこまで言うのならアンタ等のレベルを言ってみなさいっての！ どうせケットシーは1レベルでリザードマンの方は2レベルか、よくてアタシと同じ3レベルってところよね」

あ、それ死亡フラ……

そう言いながらウルフは胴体の左半身が見えるように回転した。

なるへそ、確かに胴体の左側に縦線が3本入っているな。

しかしルジーナさんには5本の線があつたし、俺にいたっては複雑な図形状態になっている。ルジーナさん曰く、俺のレベルは30レベルと言うことだから、ウルフのレベルは決して高いわけではない。

だけれど、この自慢の仕方を聞くに、3レベルってのはこの辺りではそれなりに高いのだろう。

だったら『わくスゴい』くらい驚いた方がいいのかもしれないな。それで、このウルフがいなくなるなら簡単だ。

よし、そうと決まればさっさと実行に……

「わくすい」

「

「お主の目は節穴か？ ああスマン、どうやらその目は飾りのようだ。……ギンよ、ここに居ては埒があかぬ、行くぞ」

……見事なまでに俺の作戦が爆散した瞬間であった。そして、何故かルジーナさんは俺を小脇に抱えてウルフから離れるように歩きだした。

「クツ……舐めくさって！ ……いいわよ、そこまで言うなら決闘よー！」

流石にウルフはそのまま俺たちを帰してくれるということもなく、俺たちの前に回り込んで『決闘』と、なにやら物騒なことをのたうちまわっている。

ってか、このウルフが決闘って言った瞬間から何やらルジーナさんの目が先ほど以上に細くなり、マジで恐ろしいことになっているのですが、大丈夫かな？

「ほう……ガキが我に歯向かおうと言うのか？ 悪いが我は女子供でも容赦はせぬ、我に牙をむく以上はその息……確実に止めるが良いのか？」

ルジーナさんは俺を地面に下ろすと、自分の腰に掛けてあるボロボロのロングソードを構えてその切っ先をウルフの鼻先へと向けた。流石のウルフも何かバイ空気を感知取ったのか、一瞬体をビクつかせたが、ここまで来てしまった以上後には引けないだろう。

「は、はん！ アンタなんかポッコポコのギツタンギツタンにしてやるんだからね」

「ケットシーー!!」

「って、俺かよ!?!」

第七幕（後書き）

ありがとうございました。

今話は今までで一番短い文章となってしまいました。ご了承ください。

さて、この先々も考えているのですが……考えた話を自動で書いてくれる機会があったらほしいところですね。マジで自分の文才のなさに落胆しまくりです。

感想&ご意見は随時受け付けております。お気軽にどうぞ。

ではでは、次回もお楽しみに〜

第八幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第八幕

前世でオヤジに口酸っぱく言われ続けたことがある。

オヤジは今の世にしては珍しいチャキチャキの江戸っ子で、普通に『てやんでい!』とか口にする男だった。……生まれも育ちも都心から遠く離れた山奥の人間の筈なんだが。

さてさて、話を戻そう。 オヤジが言うには…

『いいか…女には絶対に手をあげちゃなんねえぞ。 あれは、か弱いし何よりも執念深い。 一度殴っちまったら最後、末代まで祟られっぞ』

……昔、女性相手に何をしたのかが果てしなく疑問だったが。今思えば、ケットシーになったのって祟られた結果なのでは？

まあ、今はそんなことはどうでもいいや。 重要なのは今現在俺の目の前で牙をひん剥かせながら低く唸っているメスのウルフが問題なわけであって……

簡単に言うと

「何で俺が戦わないといけないの？」

「グダグダ言っていないでさっさとかかってきなさいよ！」

全く持って解せないぜ。ルジーナさんは何だか納得のいかない顔をしながら、ジト目でウルフの事を見つめている。

「月並みだけれど、本当にやんの？」

「月並みだが、勝てると思っておるのか？」

「あんた等……トコトン私の事をおちよくっているわね……！」

俺とルジーナさんの見事な連携プレーでより一層、機嫌が悪くなったウルフの少女……

今のであきらめなかった様子を見てルジーナさんは俺に目で『それなりにやっつけてしまえ』と合図を送ってきた。しかも、その後は無責任にも目を瞑って我関せずの姿勢をとりやがった。ぶっっちゃけ、俺に丸投げしたぜこのリザードマン。

……はあ、取りあえず怪我をさせない程度にあしらうとしよう。

俺は自分にそう言い聞かせながら、対峙しているウルフへと目を向けた。

そんな俺の様子を見てウルフは少し意外そうな顔をしながら口を開いた。

「はん、まあそこらのケットシーよりかは度胸があるのは認めてあげるわ」

そういえば、相手が人外だというのに表情を読み取ることが出来るようになるなんて……きつと頭脳は人間だとしても、身体はケツトシー（魔物）だからこそ可能となったのだろう。

段々と人間離れしてきている自分の事をまるで他人のように客観視している事実には驚きながらウルフの言葉へと再び耳を傾けた。

「でもねえ、アンタがケツトシーである以上、私には勝てないわ……ぜつて　へぶりゃふっ!？」

あ、ついつい身体が勝手に動いちゃったぜ。

何だか話が長くなりそうだと判断した俺は無意識のうちに先制をとっていた。

とは言うものの、流石にウルフとはいえ女の子なのだ、反射的に顔面への攻撃はやめてウルフの側面に回り込んだ後、その横腹に向かって少しだけ手を振るっただけだ。

だが、今朝方の木を切り倒してしまったときよりは手加減したのだが、それでもレベル3のウルフには威力が強すぎたみたいだ。

文字通りウルフは俺の一撃で体を折れ曲がらせながら横に吹き飛んで行った。でも、変な音とかはしなかったし、たぶん骨は折れていないだろう……たぶん。

風を切るような音と共に吹き飛ばされていくウルフの姿……もうそれは酷く滑稽だなあ〜と、自分は関係ないと言いたげなコメントを心の中では残しつつ、軽く自己嫌悪に陥った俺であった。

ウルフは横へと飛ばされたのち、地より生えている木の幹へと『ベシッ』と音を立てて衝突し、その動きを停止させた。力なく地面へと横たわっている姿は遠目でもプルプルと震えていて無事を確認できる。

俺は何となく後ろへと目を向けると、ルジーナさんも腕を組み、

眼を丸くしながらウルフが吹き飛んでいった方向を見ていた。おそらく、自分が想像していた以上にウルフが吹き飛んでいったから驚いているのだろう。ぶっちゃけ、俺自身もビックリ仰天玉手箱状態だ。

「ギン、もつと手加減できたのではないか？」

「これが俺の精一杯の努力の結晶ですね。だって……死んでないし、骨も折れてなさそう！」

俺の言葉を聞いて、ルジーナさんが少しだけ新喜劇バりにズッコケていたのが気になるところだが、そんな事よりも今しがた吹っ飛んで行つたウルフのほうが気になる。

俺はウルフが横たわっている木の幹へと目を向けた。いまだに地へと伏せているが、しきりに足を動かして何とか立ち上がるうとしている様子だ。

……うんあれだ、生まれたばかりのシカが足をプルプルさせながら立ち上がるうとする様を連想させる光景だね。

でも、このまま放置しておくのも可哀そうだ。俺はそのままウルフの方へと近づいて行つた。

俺が近付いていることに気がついたのだろう、ウルフは先ほどの俺を蔑んだ様な眼では見ることなく弱冠恐怖の色が混じつた眼で必死になり牙を剥き、眼を細めて俺を睨んでくる。

流石にたつた今吹き飛ばした人物に対して警戒を解けと言いたかったが、こんな状態にした張本人の言葉を信じることはできないと判断した俺はそのままの状態で話し始めた。

「やめよ、俺だって自分が痛いのは嫌だし、必要以上に誰かを痛ぶろうなんて思ってもないからさ」

俺の言葉に対して未だに警戒心の色は解けていない様子だが、それでも俺は話すのを続けた。

「まあ、ルジーナさんはまあ言っていたけれど……あ、ルジーナさんってのはさっきのリザードマンね。それでさ、俺も君がゴブリンと戦っているところに出しゃばっちゃったのって悪いと思ってるんだ」

俺の言っている内容が少し理解できていないようで、俺を警戒しながらもウルフはようやく口を開いた。

「つつ……な、ならどうして出てきたのよ？」

「いやね、あのゴブリンが影で奇襲を企んでいたようだから、君の邪魔にならない程度に仕留めようと思ったんだけど……いやはや、邪魔しちゃったみたいなんだよね」

俺が悪びれた様子もなく、ハハハと笑っている様子に面食らったのか、ウルフは警戒を少し解いてジト目で俺の事を見てきた。

「何よそれ……ケットシーのくせに馬鹿じゃないの？」

ようやく痛みが引いてきたのか、ウルフはその4本の足をしっかりと地面につけて立ち上がった。しかし、右の後ろ脚をヒョコヒョコさせているのを見ると、捻ったのだろう。その姿を見て罪悪感がヒシヒシと湧いてきた。

「まあ、馬鹿でもいいよ。でもさ、ルジーナさんには謝ってくれないかな？ あの人だって同じ種族の仲間がいなくなったから俺を

仲間にしたんだし……」

「……ま、まあ考えてあげなくもないわよ」

おお、話してみるとさつきまでの威張りようが嘘のように素直になつたなこの子!？」

まあでも、話しやすいに越したことはないけれどね。だけれど、なんで俺の顔を見ないで明後日の方向を見ながら話すのだろうこのウルフは？

「そっか、ありがとね。お、そういえば、君ってこのあたりの縄張りの子なの?」

「……はあ? 私はウルフよ、このあたりが縄張りのわけないじゃない」

「じゃあ、なんでここに居るの?」

「なんでって……なんでも良いじゃない」

とたんに、声のトーンを下げて話し始めたウルフの少女。……

ふむ、なんだか触れて欲しくないところみたいっぽいから、態々(わざわざ)掘り下げて話す必要もないか。

俺はそれ以上話を聞かないことに決めた。

「まあ良いけれど……あ、そうだ一応言っておくけれど俺のレベルは30だから覚えておいてね」

俺は『ほら』と言いながら額がウルフに見えるように身をかがめた。これで多分、俺の額にある模様みたいなのが見えるはずだけ

れど。一瞬にして、彼女は眼を引ん剥き驚きの表情を見せた。
たぶん、俺の額のレベルに気が付いていなかったのだろう。す
ぐさま俺の額へと目をやった。
さてさて、どういった反応を見せる事やら……

「アンタ、ケットシー……よね?」

「まあ、ルジーナさんにも言われたからね」

「でもレベル30なのよね?」

「まあ、昨日まで話すこともできなかった子猫だったけれどね」

「どうやったら一晩で魔物でもなかった子猫がレベルが30まで上
がんのよ!?!」

「まあ、進化の実って言うのを食べたからね」

「……何よそれ?」

「まあ、ありていに言えば強くなる実? 貴重なものらしいよ」

「……なんだか疲れた」

「まあ、俺もそれ以上に疲れていると思うけれど?」

「お主らそこまでにしたらどうだ? 見ている方がイライラしてく
るぞその会話」

おっと、調子こいていたら少しいらついたご様子のルジーナさんが登場した。愛も変わらず腕を組んでいるが、どうにも俺とウルフの不毛なやり取りに疲れたご様子だ。

「それで、解決したのか？」

「まあね……ほら、ルジーナさんに謝って」

「ウツ……はあ、悪かったわね…酷く言って」

俺は早速先ほどの言葉を実行してもらおうべく、ウルフにルジーナさんへの謝罪を要求した。ウルフはというと、一瞬だけ躊躇った様子だが観念したのか直ぐに頭を垂れてルジーナさんに謝罪をした。ルジーナさんかというと、イライラのご様子から一瞬だけキョトンとした表情を浮かべたが、すぐさま口から二股に分かれた深紅の舌をチヨロチヨロと出して『気にするな』と返した。

流石は元服を済ませた大人の女だなルジーナさん……どこか余裕つてもんを感じ取ったぜ。

「それで、お主はなぜこの地へ？ ウルフの縄張りはこの地よりも西へと向かった先にあると記憶して居るが？」

とたん、さつきまでの和やかムードは一瞬にして霧散して、ルジーナさんは再び眼を細くしてウルフの事を睨みつけている。
……なんだか、ついさっきの大人の女って言葉を撤回したくなってきたな。

「うっ……そ、それはあ……」

「聞けばゴブリンとやりあったのもこの付近と聞くが？」

やっぱり、彼女はルジーナさんの縄張りに住むウルフではなかったみたいだ。空気がどんどんと重くなっていくのがわかる。

ルジーナさんの言うとおり、この付近はウルフである彼女の縄張りではない。それだというのに、彼女はこの付近に出現したという問題がある。

更に深いところを突けば、彼女に絡んだゴブリンもこの付近の魔物ではないらしい。

この地オリジンはこの大きな湖を中心として東西南北に他の種族の縄張りが存在している。ルジーナさんが先ほど言った西に位置するウルフの縄張り。今朝方現れたゴブリンの縄張りは東を位置し、南は会ったことはないがゴボルドの縄張り。そして北には人間の村が存在するという。

普段はこの5つの縄張り間の移動は制限されており、ある意味で不可侵条約的なものが存在しているという。

因みに俺事、ケットシーは様々な地に分布しており、中には人間の家でお手伝いさんの存在として扱われている奴もいるらしい。

まあ、今はどうでもいいことだな。

「さて、聞かせてもらおうか？ 何故東西の縄張りのお主たちがこの地へと無断で足を踏み入れたのかを？」

話を戻そう。ルジーナさんはまるで『返答次第では命は無い』と言わんばかりに低い声でウルフへと詰め寄っている。

一方のウルフは、俺にやられたことにより体の自由があまり聞かずに逃げ出すことさえできない状態だ。

なんだか傍から見ていると虐められている子犬って感じがするなこのシチュエーションは。流石に可哀想だから助け舟を出そうか

な。

「まあまあ、ルジーナさんも落ち着いてって」

「ムウ……だがなギン」「ここは俺が聞くからさ」「……了解した」

しぶしぶといった感じで引き下がったルジーナさんはどこか納得していない表情だったが、敢えて俺に任せてくれたのは会ったばかりでもそれなりに俺の事を信頼してくれているということなのだろう。

さて、俺はその信頼にこたえるために頑張ろうかな。

「さあ、それではバトンを交代して俺が色々と聞こうかな。それじゃあまず一つね、君は西のウルフの子で間違いないか？」

「……ええ」

おお、答えてくれた。　なんでかわからないけれど、俺はルジーナさんほど警戒されていないみたいだ。

「それじゃあ、あのゴブリンってのは東のものである？」

「……さあ、知らないわ。私だって予想していなかったもの」

ふ〜ん……それじゃあ、あそこでゴブリンと遭遇してしまったのは本当に偶然ということだな。

「それじゃあ、君は何のためにここに来たの？　この地のリーダーを倒して領土を奪うため？」

「　　そ、そんなことしないわよ！」

……ふん、何となくわかったかな。　　といつても推理もろもろは雑だけれど、一応確認程度にしておこう。

「一つ、君はゴブリンの事を知らなかった。　二つ、君は領土を奪うという言葉に対して完全に否定した。　三つ、俺に初めて会ってから俺の事を探し回った。　さらに言えば、君はルジーナさんの事を知らなかった……うん、君が領土を奪いに来たということは無いと信じよう」

「……は？」

まあ、雑な推理だしこのウルフが嘘を言っている可能性もあるけれど、別の事情があつて、やもなくこの地へと足を踏み入れたというのがわかるね。

ゴブリンの事を知らなかったと言っているし、ゴブリンの息の根を確実に止めていたことからゴブリンと結託してこの地を落とすということは無いと判断してもいい。　そして、仮にこのルジーナさんの縄張りを奪うために来たとしたらルジーナさんのレベルや名前、種族を知っていなければおかしい。

さらに言うのであれば、領土を奪い取りにきた奴が初めて会った俺の事を追いかけまわす理由がわからんっていうことだ。

俺はそのことを簡単にルジーナさんへと伝えた。　なんだか驚いた様子で『考え方が人間みたいだな』と笑って返されたもんだから元人間の俺としては複雑な感じがした。

「　　と言うわけで、君が俺達に危害を加えないのなら見逃してあげる。だから、さっさと自分の縄張りに戻った方がいいよ？」

なるべく優しい口調になるように心掛けたのだが、どうにも相手に正しく伝わったのが怪しい。だって、ウルフの少女は俺の言葉を受けてもその場から一歩たりとも動こうとするそぶりは見せない。

言ったことが理解できないのか、それとも理解したうえで動こうとしないのか……どちらにしるこの状態は少し困る。

具体的に言うのであれば、今までの態度から明らかにルジーナさんはこのウルフに対していい印象を持っていない。今のウルフの態度はルジーナさんの神経を逆なでしているようなものだ。

どうにかしなければいけないと手をこまねいていると、ウルフが口を開いた。

「あ、アンタ！ 私のパートナーになってよ！！」

どこで選択肢を間違えたのだろうか？

第八幕（後書き）

ありがとうございました。

どうでしょうか、タグに魔物ハーレムとでもつけておきましょうか（笑）

一応、この後も色々キャラを出していく予定です。
ってか、今気づいたのですが8話まで書いてまともな登場キャラ3
体って……

早く色々出さねば……

ではでは、感想&ご意見は随時お待ちしております。
次回をお楽しみに！

第九幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第九幕

流石にこの流れは予想外だったぜ……と某携帯電話のお兄ちゃんバりに呟きたくなった元・人間、現・ケットシーのギンです。

突然、ウルフの少女からのパートナーになれ宣言を受けてしまいました。そんな兆候も全くなかった状態での現状なので驚きしかありません。

勿論、俺だけではなくルジーナさんもこの発言には驚きを隠せないように、眼が文字通り真ん丸になってしまっている。しかし、かたやウルフの少女は真剣そのものであり、つい先ほどまで俺の事を馬鹿にしていた者の眼とは思えないくらい真摯に俺の方を見つめている。

その状態で数十秒間、俺達は文字通り固まっていた。しかし、このままでは訳がわからないし、何よりも『ハイ、そうですか』と言えるわけもない。

俺は仕方なくウルフの少女と話を続けることとした。

「……パートナー？」

「そう、パートナーよ！ あと、私の名前はクリーヌって言うから覚えておきなさい」

そう、クリーヌね。 ……じゃなくて！

「何で……パートナー？」

「私はね、強い奴を探してんのよ。 これで、あのいけすかない奴を倒せるわ！」

話が微妙にかみ合ってねえ気がする。しかも、クリーヌは少しどうだと言わんばかりな顔をしながら説明をするもんだから、余計に意味がわからなくなってくるぜ。

そして、最後に言った『いけすかない奴』って言葉も気になるな。まあ推察するに十中八九、俺に誰かを倒させようと考えているみたいだが……

はてさて、どうしたものかな？　ってか、俺としてはこの子にさっさと帰ってほしいんだよね……だって、

「……ほお、ギンよ我の目の前に痴れ者がいるようだ　　剣の
錆にしても構わんのだろう？」

「ちょ、ちょい待ち！　頼むから舌をチロチロさせながら剣を構えないでください！」

ルジーナさんの纏った重々しい空気の所為で俺の胃に物理的な穴が開きそうなんだよね……

「はんっ、アンタには頼んでないのよりザードマン！」

「君も挑発すなー！！！」

そして、俺の心からの叫びが晴れ渡る青い空へと吸い込まれて消えゆくのであった。

・
・
・
・

その後、二人の話はまとまることなく、というか当事者の俺を差し置いて二人で話し始めておそらく2時間以上が経過しただろうか。その間、勿論のごとく俺の話には耳を傾けてくれない状態が続いた。

流星にこの状態で2時間も放置されると暇になってくる。

しかし、肝心の二人はというと……

「だ〜からっ！ 何度言ったら解んのよ、アンタ馬鹿なの？ 死ぬの？ アタシはそのケットシーを超越せつってんのよ！」

「先程から減らず口を……何度も申しておろう、ギンは我の仲間だ！」

平行線の一途を辿っている。正直言って、自分を頼ってくれる事に関しては、決して嫌な気分はしない。寧ろ嬉しいと言ってもいいだろう。

しかし、こつも当事者を放置されては、その気持ちも萎えてくる。それに……

『くぢゅひ…』

二人が口論を始めてかなりの時間が経った所為で太陽もすっかり傾いてしまい、胃袋一杯に詰め込んだ蟹の爪もすっかり消化された俺の胃袋が食物を求めるように自己主張を始めたのだ。

……仕方がない、食料を探すしよう。だけれど、日が傾いている以上、水の中で魚とか蟹を捕まえるのは難しそうだし……かといつてルジーナさんはあの状態でもじゃないが頼める様子ではない。

「ってことは、俺が探しに行くしかないってことか？ ……まあ、元々今日はこの辺の地理を覚えるために出てきた節があるからな。俺の体内時計で1時間位したらこの場に戻ってくることにしよう。」

「ったくいい加減あきらめなさいよ！」

「おまこそ諦めが悪いぞ犬風情が！」

「だから私はウルフだっつてんでしょがトカゲモドキ！」

「我はリザードマンだ！」

無駄だと思うけれど、一応一言だけ言ってから行くとしようかな。

「あの俺、そのへんを歩いてきますね？ いいですよ？ 行きますからね？」

我ながら凄く控えめすぎる自己主張だと思ったけれど、今の彼女らに何を言っても無駄だろう。俺は二人に一言を残してその場を後に森の中へと進んでいった。

二人は俺がその場から離れている事に全くと言っていい程気付いていない様子だ。

少し離れてから二人の方へ振り返ってみたが、未だに言い争いは継続のもようである。

その姿を確認した俺は再び前を向き一目散に森の中を駆け抜けていった。

風を切り裂く音が耳へと届き、身体全身で打ち付けるような風を感じた。

恐らく、これがレベル30が発揮している『力』なのだろう。

人間の時には生身では到底感じえぬ感覚を俺は楽しんだ。

……まあ、あえて言うバイクに乗って速度をかなり出した感じだろうか？

しばし、自分の走りを楽しんでいたが残念ながら今の俺の目的は食べるものを探す事である。

俺は名残惜しみながらも動かしていた足を徐々に緩めていき、停止した。

「さて……食べるものごと」

ルジーナさんが言うにはこの付近には知能を持たない魔物がワンサカいるとの事だ。

今朝、湖でとった蟹も正式にはクラブと言われつきとした魔物らしい。

一応、魔物になりきれしていない動物等もいるらしいが、その数は魔物に比べると圧倒的に少ないとのことだ。

それを踏まえた上で俺が狙うのは動物系の魔物。出来れば言葉を話さない知能が低い魔物がいい。

それと、魔物とはいえ居るか分らないが物語やゲームとかで登場するマンドラゴラとか植物系の魔物は御免こうむりたい。だって、植物とは猫にとって猛毒になりうるものなのだ。態々危険を冒してまで食べるという無謀な行為はしたくない。ってか、わざわざ毒かもしれないものを食べるほどマゾ体質ではない。

そんなこんなで夕食のことを考えていると近くで葉を擦りあわせるかのような『ガサガサ』と言う音が耳に入ってきた。

俺は反射的に近くの茂みへと飛び込み身をひそめた。

なんて事はない、運が良ければ何も知らない魔物が自分から近づいている可能性があったからだ。そこをすかさず俺がガブリとい

けば、これほど簡単なことはない。

俺は息を潜めて近付いてくる奴を待った。そして、俺の勘が当たったのかガサガサという音が徐々にだが近付いてきている。

しかし、そこで少し予想外な事が起きた。足音が明らかに一つではなく、複数の足音が聞こえてきたのだ。

俺は息を潜めながら茂みのわずかな隙間から音のする方を覗き込んだ。

かなり距離があり、10メートル程離れた場所には予想通り、こちらには気が付いていない4体のゴブリンが歩いていた。しかし、残念ながらあいつらは言葉を話すし何よりも肉が美味くなさそうだ。本当に残念ではあるが、諦めようとした時、ゴブリン達が何かを担いでいるのが目に付いた。

よく目を凝らして見るとゴブリン達は4体で1本の丸太を担いでいる。更にはその丸太に括り付けられている生きものが一匹……

「う……う……か、帰りたいよ……」

俺の見間違いでなければ、どう見ても人間の子供であろうか、10歳くらいの子供が両手両足を縛られて丸太に括り付けられているではないか。

来ている服は俺が見たこともないようなボロボロの服で、半ズボンにTシャツっぽい服を着ている程度のお粗末なもので、更に上衣には所々穴が開いているように見える。そして、ぶかぶかのパイロットキャップを被っており、額には黒で縁取られたゴーグルが装着されている。

あきらかにゴブリンの縄張りへと招待するために連れ出したわけではないことがわかる。ってか、ゴブリン達の口からとめどなく流れ落ちている汚い涎を見るに本日のディナーとなる予定らしい。

ウオ！？ 10メートル近く離れているはずなのにゴブリンの涎まで見る事が出来る俺の視力に驚きだ！

……うん、これくらいで驚かない方がいいな。さて、そんなことよりもあの子供だよな。

元・人間である以上、何とかしてやりたい気もするんだが……でも、こういうのに手を出すのってこの森で生きるにあたってルール違反とかにならないのだろうか？

今朝のクリーヌの件もあるしな……ここは少しだけ様子を

「キキキ、少し味見でもしていくか？」

「キキ、そいつぁいい。さつきから我慢の限界だったんだ」

「だったら足一本もぎ取って俺たちだけでわかるか？」

見るわけにもいかなそうだ。ゴ布林達は満場一致で我慢できなくなったのか、何やら物騒なことを言い始めた。

明らかにこの場であの子供を殺す気満々のようである。流石に手をこまねいている暇はないと俺は判断し、茂みから勢いよく飛び出して奴らへと一直線に翔けた。

ゴ布林達の言葉を子供も理解してしまったのだろう、その顔は一気に青ざめて目尻から涙を流し、あまりの恐怖からズボンに黒い染みを作っていた。

その姿にゴ布林達も若干興奮しているようにもみえるが、奴らは丸太を地面に置き、丸太にくくりつけられ横たわっている子供へと近づきながら自分の腰に装着していたナイフを取り出し、一斉にナイフを振り上げた。

しかし、その凶刃が子供を切り裂くよりも俺がその場に到達する方が圧倒的に速いのもまた事実である。

音もなく、風を切り裂きながら近づいていく俺の様子には気づいていないゴブリンと人間の子供。

そして、ナイフの刃が子供に届く瞬間、俺はありったけの力で近くのゴブリンの胴体を横になぎ払った。

『グシャリ……』

骨と肉を砕き、潰すような感覚とそれに見合ったグロテスクな音があたり一面に広がった。その刹那、俺が胴体をなぎ払ったゴブリンが近くの木の幹へ衝突した音が聞こえた。その姿は胴体部分が横向きで『く』の字に折り曲がっており、顔面の穴という穴から深紅の血液が流れ出てきている。

突然の襲撃に一齐に固まる残された3体のゴブリン達。だが、こいつらが再起動するよりも圧倒的に俺が動くのが早いぜ！

俺は、子供に一番近い位置に居るゴブリンの顔のもとまで跳躍し、自分の刀のように鋭利な爪を出した。そして、そのまま思いつ切りゴブリンの顔めがけて爪をふるった。

普通の猫ならば爪で引っかかれただけならば切り傷程度で済むが、生憎俺の爪は今朝がた軽くふるった程度で大木を斬り裂いてしまうことを実証している。そんな爪で俺は力いっぱいゴブリンの顔を斬り裂いたのだ。流石に切り傷程度で済むはずがない。

斬り裂かれたゴブリンは顔の大半の肉をそぎ落とされたかのようになり、眼球は露出し垂れ下り、頭骨の大半がが露見し、一部の脳が流れ出していた。ぶつちゃけ、超ど級のグロテスク映像にノミネートされてもおかしくは無い状態とだけ言っておこう。一拍置いてゴブリンの顔から大量の血が流れ出し、音もなく地へと倒れた。

流石に、ここまで来ると残された2体のゴブリンは目の前で起きた惨劇を理解し、ナイフの切っ先をたった今食べようとしていた子供ではなく、俺へと向けた。

だがそれも、こいつらにとっては悪手でしかなかった。正しくは今の現状を理解した瞬間、一目散に逃げ出してほしかった。

俺だって無駄に命を奪うのはいやだし、何よりも俺と子供の精神衛生上よろしくない。

ぶっちゃけ、テンションがおかしい状態の俺自身が怖くすら感じる。

しかし、それでもなおこのゴブリン達は俺へと向かってきた。

だが、俺も知能のない魔物ではないのだ。少しだけこいつらから話を聞いてもおおかしくは無い。

「お前ら東のゴブリンだろ？　ここはリザードマンの治める縄張りだ。　なんで勝手に入ってきやがった？」

俺が言葉を発した瞬間、ゴブリン達は振り上げていたナイフをピタリと止めて俺を見つめてきた。

その赤い眼は気味が悪く、何を考えているのかが全く理解できない。

一方、襲われた子供はガチガチと歯を鳴らしながら震えていた。

どうやら、今の惨劇を前にしてもなお意識を失わなかったようだ。　なんとというか……意識を失っていればある程度心に傷を負わずに

済んだのになあ〜

「質問に答える、お前らは喧嘩を売るためにこの地に足を踏み入れたのか？　ってか、ぶっちゃけ喧嘩売ってるだろ？」

俺はケットシーながら立派に生えている牙をむき出しにし、全ての爪を立てて威嚇をした。

その姿に一瞬だがゴ布林達は身を引いたが、相手がケットシーだとわかるや否やその態度を一変させた。

「キキツ……ケットシーの分際で俺たちにたて突こうとは！」

「お前もこのガキ同様に喰ってやる！」

いかにも三下風情が叩きそうな言葉を吐いて再びナイフを振り上げて俺めがけて振りおろしてきた。

どうやら、話し合う余地はなさそうだ。　　ってか、元々急に襲撃した俺の言葉に耳を傾ける奴なんかいないか。

俺は内心でため息をついて眼前でうるさく喚き散らすゴ布林を見据えた。　　2体のゴ布林は距離にして1メートル俺から離れているかいないかくらいの至近距離に位置している。

そして、捕えた子供の事は今は頭の中にないようだ。　　子供とゴブリンの距離は数十センチの半端なく近い距離。　　俺と子供の間にはゴ布林達が立ちふさがっている。

出来る事ならばあの子供を抱えて逃げ出したいけれど、俺の構造上無理だし何よりもこいつらが逃がしてくれとは思えない。　　更に言うのであれば何だかこのゴ布林達がむかつく。　　ようはあいつ等を倒せばいい。

至極簡単な結論へと瞬時に俺は導かれた。　　俺は奴らを待つことなく、一気に1メートルの距離を詰めて両前足を左右に広げ、腕をクロスさせるかのように一線させた。　　勿論爪を伸ばした状態で。

案の定、ゴ布林達は俺の速度に反応することもできずに顔の肉を先ほどのゴ布林同様にそぎ落とされて絶命した。

「や、やだ……」、ころ殺さないで」

そして、人間の子供はゴブリンが倒された事実を理解するや否や次は自分の番だと判断したみたいで先ほど以上に怯えた表情で俺の方を見ている。

ってか、俺にはカニバリズムの趣味はねえっての。

俺はゆっくりと子供のもとへと近づいた。両手足が縛られて拘束され、逃げることもままならない状況だ。

正に子供の心情は絶望しかないだろう。きっと、この子の中で自分を食べる俺の姿が浮かび上がっているのだろう。

俺は無言のまま片手を振り上げた。一応、話をつける前に縄だけでも切っておこうと判断したからだ。しかし、子供にはその手が自分の命を奪い食べるための手だと勘違いしてしまったみたいだ。子供は瞼をきつく閉ざした。そして

『ブチ』

一気に斬り裂かれた子供を丸太へと固定していたロープのようなもの。

「ここは危ない。君はさっさと帰った方がいい」

俺はその一言だけ残してきびすを帰した。そして、子供はとうとう自分の事を襲おうとしていたはずの手が自分を拘束していたロープのみを斬り裂いていたことに驚いたようで、身体を固まらせていた。

「ま、待って！」

「ん？ どうした、自分の家がどこかわからなくなったのか？」

子供は急に俺を呼びとめた。まだ腰が抜けているのだろう、先ほどよりも表情は恐怖に染まっってはいるが、ガタガタと身体を小刻みに震わせながら俺に話しかけてくる。

「あ、あの……ぼ、ボクの事……食べないの？」

「ん、なんだ食べて欲しいのか？ しかし残念だ、俺は人間を食べようとは思わないからな。食べて欲しいならゴブリンの群れにでも行くと間違いないが？」

敢えて意地悪な言い方をしてしまったのは何だかこの子供が少しいじりやすい印象を受けたからだ。なんていうのか……そう、怯えた時の震えがチワワを連想させるのだこの子は。いわゆる小動物系と言うやつであろうか？

「い、いやだ！」

「そうか、それなら問題ないじゃないか。それともあれか？ 村まで連れて行ってほしいのか？」

そして、この子供は俺が村まで付いていこうかと提案するや否や高速で首を縦に振り始めた。

……まあぶっちゃけた話、結構俺にも下心がある。だって、さつきまで空腹でさまよっていた俺だぜ？ もし、この子供の家に行ったらお礼と称して人間が食べるようなご飯を頂けるかもしれないではないか。

まあ、植物を除いてなんだけれど……そして、案の定というか子

供は俺の提案を受け入れた。　後はお礼の話をするだけだな。

「だったら、何か食べるものをくれないか？　腹ペコでな」

「多分……大丈夫。　い、家にあると…思う」

「そっか、あんがとさん。　おつと名乗ってなかったな、俺はギン、見たとおりのケットシーだ。　まあ短い間だがよろしくな」

「あ……うん。　た、助けくれてありがとう。　ボクはレン。　よろしくねギン！」

俺はそこで初めて子供の……いや、レンの笑顔を見た。　やっぱり、子供は笑顔でいるのが一番自然体かもしれないな。

そんなこんなで俺は人間の子供であるレンを村まで連れていくことにしたのであった。

第九幕（後書き）

ありがとうございました、かみかみんです。

本日はこちらの方を先に仕上げました。『Re：俺！？』はおそらく明日にでも更新できると思いますので、しばしお待ちください。さてさて、9話にして漸く人間を登場させました。次話は子供のレンとのかかわりについて書いていきますのでよろしくです。

ではでは、ご意見&ご感想は随時受け付けております。一言でも残していただけるとテンションが上がりますので是非とも……
それでは次回もお楽しみに！

第十幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第十幕

「村へ行く前にレン、そのズボンをどうにかしたほうがいいかもしれないよ」

「へ？ズボンって……わわっ！み、見ないでよギン！」

「やあ、気が付いたら森の中で助けた子供を村へと送ると言う任務を受けたギンだ。」

「辺りはすっかり夕闇に包まれている今現在、しかもゴブリン達が問答無用でルジーナさんの縄張りを荒らしているので仕方なしの労働だったりする。」

「まあ、本命は飯を貰うと言うことなただけだね。」

「そんなこんなでレンと森の中を歩いていたんだが、レンのズボンが大変な状態になっている事に気がついたんだ。」

「大人の都合って言う奴で、ナニでドウ大変なことになっているのかは言わないが、取りあえず大変なことになっている。」

「俺は別にそのままでも良いんだが、レンも子供とはいえ、羞恥心くらいはある事だろう。しかも、レンは見たところ、10歳前後、小学4年生位の歳だと言うのにこの状態は本人にとっても辛いに違いない。」

「しかし、俺も少し言うタイミングが悪かったかもしれない。森の中から村へと歩き続けて早くも1時間弱……レンによるともう少しで村についてしまうらしい。」

「ゴブリンと出会った場所ならば、ルジーナさんの湖が近かったのだが、此処まで来てしまうと村へと行った方が早い。」

「うう……恥ずかしい……でも、ズボンを洗うところもこの辺りには

無いし」

「別に家に帰ってからでもかまわないんじゃないのか？ 俺は別に気にしないぞ」

「ボクが気にすんだよ！ ……でも、ギンの言うとおり家に帰ってからにしよう。この辺で水場を探すよりも確実だし」

ふむ、どうやら方向性は固まったみたいだね。しかし、何だつてレンはこんな時間に森に来ていたんだ？

森に来なければゴブリンに襲われることも無かつただらうに。

「なあ、何でレンは森に来ていたんだ？ 流石に一人じゃ危ないだらう？」

「危ないを通り越して命の危機に瀕していたけれどね……森では薬草を摘んでいたんだよ。……とは言っても、籠はゴブリンに壊されて今日は収穫ゼロだけれど……でも仕方ないよ、ボクは一人暮らしだから食い扶持は自分で作らないとだし」

アハハと自嘲気味に笑いながら答えているが……レンって一人暮らしだったのか？ どう見ても子供なんだけれど……両親と一緒に暮らしていないのか？

いや、少し待てよ俺。もしかしたらこの世界では10歳くらいの子供が一人暮らしをするのは当たり前なことなのかもしれない。寧ろ、俺はレンの事を子供と決め付けているが、実際のところ大人という驚きの正体があるのかもしれない。

「どうしたのギン？ 黙りこんで……あ、もしかしてボクが一人暮らしって事を心配してくれているの？ だいじょーぶだよ、村長さ

んだって優しい人だしアンやカレンも居るから寂しくなんか無いよ」

……どうやら、両親と暮らすのはこの世界でも当たり前のことらしい。それでも両親が居ないのか……まあ、本人はこう言っているんだし理由は聞かないでおこう。

それに、余所者で魔物の俺が気にする必要は無いのかもしれない。そのように判断した俺はそれ以上の理由は聞くことなく、レンの横を黙って歩き続けた。

その後は、レンの村のことを聞いたり、先程話にも挙がったアンと言う子とカレンって言う子の話を聞いたただけなんだがね。

しかし、話に出てくる友人が女の子とは……レンはきつとプレイボーイになるんじゃないのかな？ 顔も10歳位だって言うのに整っているし。

キィー！ イケメンが憎らしいわ！！

少し取り乱したな。 そんな感じでレンと談笑しながら歩き続けること凡そ30分。 気がつくと、今まで木が生い茂っていた森を歩いていたはずだったのに、かなり開けた場所に着いた。

「さあ、ここがボクの住んでいる村『オリジンブリッジ』だよ。ようこそギン！」

一歩前に出て俺に振り返るように村の紹介をしたレン。

なるへそ、ここがルジーナさんの言っていたオリジンの北に位置する村か……

今俺の眼下にはそれなりに広い……といつても実感がわかないが、目測で大体ドーム球場4つ分位のかなりの広さを誇る村がある。そして、村の入り口を思われる場所にはよくわかんない文字が描かれている。アルファベットでも日本語でも寧ろ、地球上には無いような文字を見ると、『ああ、本当に異世界に来たんだ』と嫌でも実感させられるような気になるな。

村の中では村人と思われる人が重そうな荷物を抱えて運んだり、子供連れの間が楽しそうに歩いていたり、活気はよさそうだ。そしてあちらには、どう見ても魔物の姿が……って！

「な、なあレン。何であそこに魔物が居るんだ!？」

俺の目に飛び込んだのはすさまじい光景だった。だって、ゲームとかに出てくる冒険者と同じような格好をした青年の後ろをウネウネと青く透明染みたゲル状の生き物がついていつているのだから。ああ、あれはきつとスライムなんだろうなあ。と軽く現実から遠ざかったことを考えてしまった俺は決して悪くは無いと思う。

あ、あつちにはウサギみたいなのに頭に角が生えたやつがいる! ? あ! あつちには俺が今朝方食べたクラブに似た蟹もいるじゃねえか! ?

「え? ……ああ、あれは使い魔だよ。ギンは知らないの? 冒険者の人たちって殆どの人が魔物テイマー使いで冒険に魔物を連れて行くことが多いんだよ」

し、知らなかった。ルジーナさんはそんな事は一言も言ってくれなかったのに。

しかし、テイマーか……何だか面倒くさそうな感じだな。でも、俺には関係ないな。だって、人間と一緒になって冒険しよう

とも思わないし。

どちらかと言うと、スリリングを求めるよりもルジーナさんの縄張りでひそやかに暮らしていきたいな俺は。

「それに、この村には冒険者ギルドがあるからね。魔物自体も他の街ほど凶暴なものもないから、冒険者の初心者さん達が多いんだよ」

「ふ〜ん……なあレン、冒険者のうんちくは良いんだけど、さっさと着替えた方がよくない？」

なんだか熱心に冒険者について語っているところ悪いんだけど、レンって今の自分の状態をわかってんのかな？

俺が話を振ってなんだけれど、そんなに悠長に話していても大丈夫なのかな？

「着替えて　わわっ！？　ぎ、ギン！　こっち、こっちだよ〜！」

レンは一瞬だけ、キョトンとした顔をしたが、直ぐに自分の状態を思い出して『ボンッ』という擬音がつくほどに顔を赤く染めた。

どうやら、本気で今の自分の状態を忘れてしまっていたらしい。

……もしかしてと思っただけだが、レンは天然なのかもしれない。

そうして俺たちはなるべく人に会わないように民家の裏を通ったりしながら村の奥へと進んでいった。

村に入ってから5分程、裏道を歩いただろうか。俺たちはとある民家へと辿り着いた。

レンによると目的地としていたレンの家らしい。
幸いなことに村民に出会うことなく、レンは無用な恥をかかずに済んだ。

だが、俺の心情は少し違い事を考えていた。

「（小さい家だな……）」

口にしたら果てしなくレンに失礼なことではあるが、俺の見た限りでは今まで歩いてきて見た民家よりも二回りくらい小さい家を感じられる。

おそらく両親がいないからだろうと考えてはみたが、両親が健在の時はどうだったのだろうか？ と新たな疑問も出てきた。

……いや、それはきつと俺が触れてはいけない事だな。それに知ったところで俺にどうにかできる問題でも無いしね。

俺は浮かび上がった疑問を忘れようと頭を左右に振った。

「さあ、ギン入ってよ」

そう言いながらレンは扉を開いた。

「おう、お邪魔するぜ」

取りあえずは、難しいことを考えずに食べるものだけ食べてさっさと帰ろうと俺は心の中で呟きながらレンの家へとお邪魔することにした。

家の中は外の小さいような印象とは違い、結構広いように感じられた。意外と置いてあるものは少なく、1Kアパートよりも少

し広い部屋という印象だ。

隅の方にはベッドが設置してあり、その横には着替えが入っているであろうクローゼットらしきもの。そして、部屋の中央にはテーブルと椅子が1セット置いてあるだけのシンブル・イズ・ザ・ベストという言葉が当てはまるような広さの家である。

ってか、キッチンらしきものが見当たらないんだけど？ それにトイレらしきものも見当たらないし。

本当に必要最低限『暮らす』だけの部屋って感じだな。

そんな俺の心を読み取ったのか、レンは口を開いた。

「狭い部屋でごめんね。でも、寝るためだけならあんまり不自由しないんだよ？」

「飯とかはどうするんだ？」

「ご飯は森の中で木の実とか食べれば済むんだ。……たまに今日みたいに魔物に襲われて死にそうにはなるけれど。それに身体を拭くのだって近くの川に行けば済むことだし。……まあ、冬になると死ぬほど寒いけれど」

な、何だか凄くレンが不憫に見えて仕方ないんだけど？ って
いうか、こんな家に俺が食べれるようなものなんてあるのか？

「それで、俺が食べられそうな物ってあるのか？」

「あ、うんあるよ。えつとね……」

そう言いながらレンはベッドの下の僅かなスペースに頭を突っ込んで何かを引っ張り出そうとしている。……何故だろう？ 果て

しなく嫌な予感しかしないんだけれど？

そうして、待つこと十数秒。　　レンはベッドの下から何かを引っ張り出してきた。

「これだよ。　　最近ベッドの下に生えてきた『キノコ』！」

えっと、俺はこういうときどんなリアクションをとればいいんだろうか？

まず、一つずつ整理していこう。　　俺は『食べられる物をくれ』と言ったんだ。　　ここまではいい、レンだって『家に行けばあるかも』と言っていたし……

しかし、いざ来てみればこれは何だ？　　ベッドの下のキノコって……しかも、見たところ赤の下地に青い斑点が大量についている明らかに『危険です！』と言わんばかりに自己主張を繰り返しているこの禍々しいキノコは？

「それ……食べるのか？」

「食べられるよ！ボクも食べたし。　　ただ、なんだかこれを食べると笑いが止まらなくなったり、ベロが凄く痺れたり、死んだはずのお父さんやお母さんに会える不思議なキノコ」

間違いなく毒キノコだろー！ー！！

ってか、ご両親亡くなっていたのかよ！？　　敢えて聞かなかったことをさらりと言いやがったよこの子は！

更に言わせてもらえば、ベロが痺れたり笑いが止まらなくなった時点で食べるのをやめようよ！　　今まで死ななかつたのが不思議なくらいだよこの子！

って、ちょっと待ってよ？ 食べ物を要求してこの明らかに毒にまみれたキノコを出すってことは……

「な、なあ……まさかとは思っけれど『食べる物』ってこれしかないのか？」

「え？ うんそうだけれど。もしかしてギンってキノコ嫌いだった？ ごめんね、それなら家にはギンが食べられるものは無いかもしれないな……」

あ、歩き損かよ。これだけ歩いたのに、食べるものがないとかマジ勘弁だな。おっと、それよりもレンに注意だけしておこう。

「レン、それは明らかに毒が入っているキノコだから食べるのはやめた方がいいよ。食べているとそのうち知らない間に死んじゃうよ？」

「え」！ そ、そんな危険なものだったの！？」

レンは手に持ったキノコは慌てて手放した。むしろ、ベッドの下に生えるという時点で怪しいものだと思うんだが……いや、レンはまだ子供なんだ。そういった判断は出来ないのかもしれないな。それよりも、食べ物が無い以上ここに用は無いからな。さっさとルジーナさん達のところに戻った方がいいかもしれないな。もしかしたら、俺の事を心配しているかもしれないし。

「レン、食べ物がないみたいだし俺は帰るよ。じゃあな」

「ちよ、待ってよ！ ボク、ギンに何もお礼をしてないよ！ お父

さんが言っていたよ。いいかレン、お世話になったらちゃんとお礼をしないと良い大人にはなれないぞ。』って！」

う、うむ……いい教えだとは思っただけけど、何かしてもらったとは無いしね。それに欲しいものだって……およ？

俺は何かめぼしいものが無いかレンの家の中をグルリと見まわした。根本的にレンの家には何かを置くということがあまりないらしい。ベッドとテーブルに椅子以外俺の眼を引くものは無く、あとあるとしたらレンの着替えが入っているであろうクローゼットモドキだけだ。

俺は何もいらぬのだが、そのままではレンが俺を帰してはくれないだろうし……少し困ったな。

どうにかしようと思わずにレンの顔を見ると頭に乘っかっているパイロットキャップとゴーグルが目についた。

なんでもいって言うし、あれでもいいのかな？

「レン、だったら今レンが被っているものをくれないか」

「ボクが被っているもの？ ……って、この帽子とゴーグルのこと？」

レンは自分の頭を指さしながら俺に聞いた。

俺は首を軽く縦に振り、『そうだ』と呟いた。

「全然大丈夫だよ。えへへ〜でも嬉しいなあ〜 この帽子はね、ボクのお手製なんだ！ それを欲しがってくれなんて嬉しいよ」

おお、凄いな！ 帽子を10歳位の子供が作るなんて……とても

じゃないけれど、俺が10歳の時なんてそんなことは出来なかったぞ。

そして、レンは被っている帽子を外した。帽子の下からは隠れていた金色の髪が現れた。

帽子の中で束ねていたのか、レンの髪は肩ほどの長さまであり、端正な顔立ちのレンは一見すると『女の子』のようにも見える。

「ちょっと待ってね」

レンは帽子をテーブルに置くと、クローゼットの扉を開き、中を少し物色したのちナイフのようなものと、裁縫で使うような針と糸を取り出した。

一瞬、それで何をするのかが疑問に湧いたが、それはすぐさま解決することとなる。

レンは帽子の上部に2カ所の切れ込みを入れて、その部分が裂けないように周りを糸で補強した。何のためにか疑問に思ったが、どうやら俺の耳を出すための穴を作ってくれているみたいだ。

そう言えば、俺の体はケットシーで人間ではないのだから当然のごとく頭に耳が2本生えている。なるほど、レンは気が利く子なのだと一人で感心していると、素早い手さばきでレンは作業を進めていった。

そして、ものの数分もしないうちにパイロットキャップには耳穴が作られた。その仕上がりはとも子供が作ったとは思えないような綺麗さで、まるでミシンで編みこんだのかと疑問に思えるほどの仕上がりであった。

レンは出来上がったばかりの帽子を俺に被せてくれ、おおくと軽く声を挙げた。

「ギン、すつごく似合っているよ！」

「おう、サンキューな！」

「……サンキューって？」

おっと、日本語は通じるけれど英語は通じないのか。……あれ？
でもこの村って確かオリジン『ビレッジ』って……いや、深い事は聞かないでおこう。

「ありがとうって意味だよ」

「おおー だったら、助けてくれて『さんきゅー』だよギン！」

レンはにつこりと眩いばかりの笑顔を浮かべた。
そして、俺はその後すぐにこの村から出て行ったのであった……

「ギンかー 凄くいいケットシーだったなー って、早く着替えないと……」

ギンが出て行ったあと、ボクは直ぐにズボンを着替えた。あの時は必死だったからついつい汚してしまったズボン。

それを脱いでボクは汚れてしまった下半身を濡れた手拭いで拭いた後、昨日乾したばかりのズボンを穿いた。

うん、やっぱり綺麗なものを身につけると何だか気分が

いいなあ」

そんな時だ、突然ボクの家に来訪者が現れたのは。

「レン、邪魔するわよ！」

「お邪魔しますねレンちゃん」

「わわっ！？ あ、アンにカレン！？ は、入ってくるなら一声かけてよ！」

突然家の中に入り込んできたのは仲のいいアンとカレンだった。青く短く乱雑に切られた髪をしているのがアン。そして、ピンク色の髪を背まで伸ばしている少しおっとりした子がカレンだ。

あまりにも急に二人が入ってきて、ついつい声を荒げてしまった私は決して悪くは無いと思いたい。

それよりも、着替えた後に来てもらってよかったな。これが着替える前に来たら凄く恥をかいていたところだと思う。

「何言ってるのよ、私たちの仲じゃない。気にするだけ無駄よ」

「それよりも、今度の事なんだけど……」

アンがさも当然と言わんばかりにふんぞり返っていることに対して一言モノ申したいけれど、今のボクは新しい出会いがあったから少し気分がいいんだ。

だから、許してあげようと思う。

そして、カレンはボクに何かを伝えようとしている。 たぶん、

ボクの予想が外れていなければ……

「あ、うん。ボクが20歳になったら皆で冒険者になるって話だよね？ 村長さんから了解はもらえたの？」

ボクはこう見えていま19歳の大人目前なんだ。ほとんどの人がボクを見たら10歳そこいらの子供って思うんだけど。

そして、10日後には20歳を迎える。その日にボクを含めた子の場に居る3人は冒険者の一步を踏み出すことになる予定なんだ。

「ええ、たしか10日後だったわよね？」

「村長さんが『さみしくなるな』って言っていたよ」

そっか、村長さんを含めてこの村の人たちにはすごくお世話になったからね。今度挨拶に行つてこようっと。

「あ、そうそうアンタ自分の使い魔をどうするか決めたの？」

「うーん……それがまだなんだよね。アンとカレンはどうするの？」

「私達はオリジン内で見つけようかと思っているんだけど……レオンちゃんもそうする？」

二人ともここで使い魔を見つけるんだ。確かに、他の大陸では強い魔物に出会えるけれど捕まえるのは一苦労だし……オリジンの魔物は比較的レベルが低いから使い魔にしやすいといったらしやすすいんだけど……でも、もしオリジンで使い魔を探すことになったらギンにまた合えるかもしれない。

それに、よく考えたらギンってケットシーなのにゴブリンを4体相手にしても圧倒していた。つまりは、かなり高レベルのケットシーなんだ。ギンだったらボクも安心できるし何よりも戦わなくてすむかもしれない。

ああ〜こんなことなら、さっきお願いしておけばよかったよ。

「ボクもオリジンで探すことにするよ」

「あら？ アンタのことだから『ボクはほかの大陸で探す〜』って言い出しそうだったのに以外ね」

アンの中のボクっていったいどんなことを言い出すのが常なんだろう？

「それなら10日後、冒険に出発するとき3人で使い魔になってくれそうな魔物を探しに行きましょうか」

「そうね。それにしてもいよいよね、今からでもワクワク感がおさまりそうに無いわ」

「うん、不安なこともあるけれどボク達ならどうにかなると思うよ」

ああ……本当に楽しみだなあ〜ドキドキワクワクの冒険がボク達を待っているよ……！

第十幕（後書き）

ありがとうございました。

今回は少し説明会と伏線モドキをはってみました。 ばればれではありますが（汗）

さて、『Re：俺！？』は今週はお休みさせて頂きます。 来週には更新できると思います。 一言でも残しでは、感想ご意見は随時お待ちしております。 一言でも残して頂けると幸いです。 一
では、かみかみんでしたあゝ

第十一幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第十一幕

レンの住む村を後にした俺は足早にルジーナさんとクリーヌがいる湖へと戻っていた。あたりはすっかり夜の闇へと包まれており、昏間は見られなかった魔物を数匹見る事が出来た。

見たこともないウサギっぽい角の生えている生物とか、やけに大きい蝙蝠や蜘蛛。ゲル状で一見すると生き物には見えないけれど明らかに自立運動をしているスライム(?)とか。

どうやら、このあたりに住む魔物は夜行性の奴が多いようだ。かくいう俺も猫だけに夜目が利いてるのできつと夜行性なんだろう。

最も、猫だけにデフォルトで隠密スキルが入っている俺にとっては、奴らに気づかれずにここを通り抜ける事はわけないぜ！

っては言ってみたものの、あたりはすっかり暗くなっちまったしなあ。

気がつくくと完璧に今は丑三つ時。要は深夜真つただ中だ。

何だかんだ言って今朝からずつと動き回っているし、レンの家ではまともなものを食べることも出来なかったので空腹をフルスロットルを通り越してリミットブレイク状態だったりする。

そんな状況下でこれ以上進むと間違いなく遭難してルジーナさんの湖に戻る事ができなくなりそうだ。

「じゃあない、今日はこのあたりで寝て朝になったら戻るとしよう」

俺はそう結論付けて寝床になりそうなところを探した。

幾ら俺が隠密スキルを持っていたとしても、寝てしまったら無防備この上ない状態だ。ルジーナさん曰く、俺のレベルはこの辺り

では破格過ぎると言っても過言ではないくらい高いものである。

けれど、あんまりレベルの上に胡坐をかくような事だと寝首を搔かれることだってあるかもしれない。ましてや睡眠状態で襲われて無事である可能性が100%と言えない今、俺は少しでも安全な寝床を探す必要があるわけだ。

当然のごとく地面は危険度マックス。昨日みたいなほら穴や洞窟もこのあたりにはなさそうだ。

「と言うことは……」

俺は頭上を見上げた。当然のごとく森の中と言うことで木が生い茂っており、夜空が葉で隠れんばかりに覆われており隙間から月明かりが見え隠れしている。

「木のぼり……出来るかな？」

猫だけに。

・ ・ ・

木には思ったよりも容易に登る事が出来た。

人間だったときも子供の頃に木登りをしていた記憶はあるが、それとは全く違う要領で……具体的に言うのであれば、自分の爪を雪山に登る際に使用するピッケルのごとく木の幹へと突き刺しながら登った。

なるほど、猫がスイスイと木に登ることが出来る理由を垣間見た気がするぜ。

さて、話をすりかえるのはこれくらいにしておいて、木の上は意外と開けた感じとなっていた。木の枝だつて元いた世界の木々とは違ってかなり幅の広い感じがする。恐らく、ここで幾ら寝返りを打とうが、相当寝相の悪いやつでなければ木の上から落ちる事は無いほどの広さだ。

木の高さは目測で10メートル程、まず人間が落ちたら死ぬ高さだが……俺猫だし、つてか魔物だしまあ、問題はないでしょ。

さて一夜の宿は決まった。あとは空腹さえどうにかできればいいんだけど、この際贅沢なことは言いつこなした。

俺は空腹をごまかすかのように枝の上で横になり瞼を閉じた。

そうして、俺の激動の異世界生活二日目が終了したのであった。

「フゴッ!？」

翌朝、俺の意識を目覚めさせたのは眩い日の光でも爽やかな風でも魔物の襲来でもなく、先にジェットコースターにでも乗っているかのような浮遊感、その次に身体全身に走る原因不明の激痛だった。身体の痛みは眼を開けた瞬間に理解することができた。

「地面……あれ？ 木の上で寝ていたは？」

「どうやら、落ちるはずなんかないと高をくくっていたにも関わらず、

ご期待通り落下してしまったらしい。

自分の寝相の悪さをことうして実感することになるなんて思いもよらなかつたけれどな。

しかし、10メートル位の高さから落下したのに生きているという現状に驚きだな。 更に

俺は四肢に力をこめると四つんばいになるように立ち上がった。

「骨とかには異常は無いみたいだね。 流石は魔物……あり？ 何

だか昨日とは違う気が……？」

立ち上がった瞬間、身体に痛みなどの違和感は全く感じられなかった。

無傷ということに安堵した俺だが、直ぐ様昨日は感じなかった違和感に気が付いた。

そう、具体的に言うのであれば、レンからもらった帽子が昨日の時点ではブカブカだったのに対して今は物凄いフィットしているように感じたり……

昨日迄とは違って四つ足で立ったときの目線がやけに高くなったように感じたり……

簡単に言うと……

「身体……でかくなってないか？」

我ながら至極簡潔にまとめた感想だと思ったのは割愛しておこう。

「それで……ギンはどこに行ったの思う？ クリ」

「クリはやめなさい！ って言うか、私を知るはずないじゃない。
あんた達仲間なんでしょ？ あんたの方が心あたりあるんじゃないの」

ところ変わって湖のほとり。あの後彼女等は夜を通して言い争いを続けていた。ギンがその場にいない事に気がついたのは夜も明け太陽が昇ってきた後であった。

当然のごとくギンはその場に居るであろうと思っていたっ彼女達はキョトンとした顔をしたが、直ぐにギンがその場にいない事を知り、ルジーナが治める森中を探し回った。

しかし結果はかんばしくなく、2体ともギンを見つける事が出来ずにいたのだ。

「大体、あんたがギンをくれないのがいけないのよ」

「ふん、得体の知れぬ輩に仲間をホイホイ差し出すほど我は薄情ではない　　む？　クリ、誰か近づいてくるぞ」

……一晩経つても言い争いは続いているようだ。

と、そこヘルジーナが森奥から湖へと近づいてくる気配を察知した。クリーヌもルジーナの言葉に意識を戦闘態勢へと持っていき、身体を低くいつでも飛びかかれるような体制をとった。一方のルジーナも右手を腰に掛けてあるロングソードへとかけていつでも抜刀出来る体制をとる。

緊迫した空気であったが、次の瞬間現れた陰に二人は愕然としたのであった。

「　　ッ！？　　ちょ、ちょっと！　　あれって『ワイルドキャット』よね！？　　な、なんだってオリジンにあんな魔物がいるのよ！　　！」

「わ、我がそんなことを知るはずがなかるう！　　……し、しかしどうする？　　あれは私の記憶が確かならば少なくともレベル10は超えておるはずだ。　　我はレベル5、クリはレベル3……どのように転んでも勝ち目は低かるう」

彼女らの前に現れた魔物の名は『ワイルドキャット』。名前こそ猫とついているが、性格は獰猛であり、始まりの地であるオリジンにはいるはずのない凶悪生物と言っても過言ではない存在だ。ワイルドキャットとして誕生した個体は子供でありながらもレベルは10を超えておりオリジンに住むリザードマンやウルフでは到

底敵わないほど実力はひらききつている。

通常ならばワイルドキャットは縄張りの外に現れる事は無い。

しかし、この場に現れたのは新たな領土を獲得に来たのか、はたまた縄張りを持たぬ若いワイルドキャットなのか……しかし、そんな事は彼女らにとっては何ら問題は無かった。

あんな凶悪な存在が現れた以上、自分たちに訪れるのは明確なる『死』のみ。それを本能で理解していた。

銀色の毛並みを持つワイルドキャットは彼女たちに気がついたのか、その双眼で彼女たちを見据えている。そして、何故だか頭部には人間が被つていそうな衣類が乗っていたがそんな事を彼女達が気にする余裕などは存在していなかった。見たところ体長はゆうに2メートルを超えそうなほど巨大で、体高はルジーナの身長ほどはあるであろうか。

「(クツ……まさかこの地にワイルドキャットが現れるとは……ギンが居てさえくれればどうにかなった矢も知れぬが)」

「(ちょっと……わ、私はまだ死ぬわけにはいかないのよ！ これからギンにアイツを倒してもらわないといけないのに！)」

そして、ワイルドキャットがゆっくりと口を開き……

「あ、漸く話し合いは終わったんだ。それで、俺はどうすればいいの？」

・ ・ ・ ・ ・

『は？』

ワイルドキャットの口から思いもよらぬ言葉が飛び出してきた。その言葉を理解するのにたっぷりと10秒をようしてしまったが

死を覚悟していた手前、頭が正常に働かず2体とも間抜けな返事を
してしまったのは仕方がない事である。

2体が口をあんどくりとあけている様子を變に思い首をかしげなが
らもワールドキャットは話を続けた。

「いや、俺がクリーヌに付いて行く行かないで昨日ルジーナさんと
話してたじゃんか」

「な、何故我の名を知っておるのだ!？」

「な、なんだって私の名前を知っているのよ!？」

2体の反応は当然の物と言えよう。見知らぬ凶悪な魔物にまる
で友人のように気軽に話しかけられているのだから。

「いや、昨日教えてくれたじゃん。 って言うかルジーナさんとは
昨日仲間になったばかりじゃんか」

「ちょ、あんたいつの間にこんな凶暴な奴を仲間にしたのよ!？」

「し、知らぬぞ! 昨日は とうか、最近仲間になったの
はギン以外知らぬ!!」

「なんだ、覚えているんだ。 よかったよ、忘れられたらどうしよ
うかと思っちゃったよ」

一瞬、空気が凍ったかのような音が鳴り響いた。 2体
は驚きの眼でワールドキャットを見つめ。 一方のワールドキャッ
トは安堵した表情で彼女等を見つめていた。

傍から見たら、明らかに狩る者と狩られる者の構図だが明らかに

そのような殺伐とした空気はその場には漂っていなかった。
そしてルジーナはそこである『答え』にたどりついた。

「お、お主……もしや…ギンか？」

「そつだよ〜全く、何言っちゃってんのルジーナさんは？」

悪びれた様子もなくサラリと答えたワイルドキャットを見てルジ
ーナとクリーヌは……

「シユ、シユー……」

「きゆう〜……」

「ちょ、二人ともどうしちゃったんだよ!？」

取りあえず、緊張の糸をほどくために意識を飛ばすことに決め込んだ。

「そ、それでだギンよ。 おぬし昨日はどこに行っておったのだ？」

「そんでもって、なんだって一日見なかっただけでケットシーからワイルドキャットに進化してんのよ!？」

俺が湖に戻って早々に二人は気絶してしまった。 何やら二人の様子がおかしかったのは何となくではあるけれど気が付いていたんだが……まさか気絶するとまでは思いもよらなかったな。

そして、その後1時間ほど放置したところ二人はほぼ同時に目を覚まし、こうして俺に詰め寄ってきているのだ。

話を聞くと、どうやら俺はワイルドキャットと呼ばれる魔物に進化したらしい。 その所為で体が大きくなったのだと知った時は妙に納得してしまった。

「まあまあ、落ち着いてよ二人とも」

「これが落ち着いておけるか!」

「そうよ! 私たちの緊張を帰してよ!!!」

なんでも俺があの場合に現れた瞬間は二人ともマジで死んだと思っ
たらしい。 どうやら、この世界に居るワイルドキャットと呼ばれ
る魔物はかなり凶暴な性格をしているらしい。 しかも、それに実
力も伴っているものだからタチが悪いとのことだ。

「まあ、そんな事は今はどうでもよい。 それでギンよ、昨日はど
こに行っておったのだ？」

話がだいぶ反れて行きそうだったのに気がついたルジーナさんは
話を無理やり転換し、昨日の俺の行動を聞いてきた。

そう言えば、昨日のゴブリンの事とレンの事を話しておいた方が
いいかもしれないな。

俺はルジーナさんの質問に答えるように昨日起きた事を簡単に説
明した。 昨日、お腹を空かして森を彷徨っていたらゴブリン達を
見つけた事、その時にレンと言う人間の子供を助けた事、そのまま
人間の住む村まで言ってきた事。 帰りがけに寝て、眼を覚ました
ら進化していた事。

俺は包み隠すことなく答えた。 それを聞いていた二人はなぜだ
かまたもや驚きの表情を浮かべた。 今の話で何か驚くような事を
言っただか俺？

「ぎ、ギン……アンタ、人間と話せるの!？」

「妙な輩とは思っていたが……まさか人間と会話できる魔物がいる
とはな」

「え……え? だって、普通に話していたよ?」

何だかおかしい話になってきたぞ。 今の二人の反応を聞いてい

るとまるで魔物は人間と会話できないと言いたげな空気なんです。

その後、人間と魔物の言語について俺は二人から説明を受けた。曰く、基本的に魔物は人間の言葉を理解できないし、人間も魔物の言葉を理解できない。

獣人やエルフ、魔族などは会話が可能だが、基本的には魔物は無理とのことだ。俺としてはこの世界にエルフとか魔族が居るといふ事実だけで驚きもんなのだがね。それを踏まえたとうえで俺は変な存在らしい。

「例外としてティマーとファミリアは違うけれど……」

「コヤツらは会話ではなくテレパシーで対話を試みるのでな、例外中の例外だ」

「ふん……まあ、喋れて損は無いか」

さて、人間と会話をできる事については満場一致でスルーを決め込んだ。そして、進化については本人である俺がよくわかっていない事、ルジーナさん達が進化した事がないという点から『原因不明』とされた。

しかし、初めの寝て起きたら猫からケツトシーになっていた事例と今回は少し似ているので、一晩経ったら進化するというのは何となく理解できた。そして、レベルもある程度高いと進化する可能性が高いということもわかった。……もしかして、明日になったらまた進化しているんじゃないか？

「俺の方はこれ位かな。正直訳の分かんない事だらけだが……まあ許して。それで、昨日の話の続きだけれど俺はクリア又につい

て行くの行かないの？」

さて、話題は昨日のクリーヌの『私のパートナーになってよ』発言に移るとしよう。

しかし、自体は俺が思っていた以上に進んでいたみたいで……

「お主と我、そしてこのクリで今からウルフ族の集落を治める者を倒しに行くぞ」

……なぜそのような物騒な話になったのかだけでも教えていただけると幸いですと思った俺は負け組みなのでしょうか。

第十一幕（後書き）

ありがとうございました。

『Re：俺！？』はしばしお待ちくださいませ〜

やっどこさ仕上げました。中々タグにある擬人化まで辿り着けませんでしたね……恐らくかなりかかりますので悪しからず。

さてさて、今後の話もだいぶ考えてはいます。そして、ギンはケツトシーからワイルドキャットへと進化した〜

今後も進化していく予定です。

ではでは、感想&ご意見は随時お待ちしております。ぜひとも一言残してくださいと作者のテンションも上がり指の速度が増すやもしれません。

それでは次回もお楽しみに〜

第十二幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第十二幕

「……なあ、なんでこうなったんだっけ？」

「どこかの怒阿呆が考え無しに敵を挑発し、我らをまき添いにしたと記憶しておるが？」

「クツ……さ、流石に今回のことは、少し…ほんの少しだけやり過ぎちゃったとは思っわよ！ でもねえ

何が悲しくて同族のウルフ数十体に囲まれなくちゃいけないのよ!？」

「やあ、ただの猫からケツトシー。更にケツトシーからワイルドキャットへと進化をしてみた俺ことギンです。

急だが今現在、俺たちは絶賛ピンチ中だったりする。

何故こんなことになってしまったのか……決して俺のせいではないと言う事は始めに言っておく。

それもこれも、俺がルジーナさんが拠点としている湖に戻った時から始まった

「俺達でウルフの集落のボスを倒す？」

「そつだ。ほれ、クリが言っていたであろう『私のパートナーになれ』とな。それもこれもその頭を倒すためらしいのだ」

その後ルジーナさんは『詳しくはクリに聞け』と言い残して一歩下がった。あれほど嫌がっていたルジーナさんが了承したんだ。きつと厄介事に違いないと俺は心の中で盛大にため息を吐いたが、話の流れからして俺はものすごく頼りにされているらしく口に出す事はしなかった。

そして、ルジーナさんから話を振られたクリが自分の縄張りの事情について語りだした。

「まず、私には兄さんが居たのよ。この兄さんがまたできたウルフでね……少し前まで兄さんがウルフ族を仕切っていたリーダー『だった』のよ」

ウルフの縄張りと言うのと一つの塊を連想してしまうが、数頭、数十頭の群れが幾つも点在している塊で、クリーナの兄はその塊を統括していたウルフだとのことだ。

クリーナの兄は所謂平和主義者らしく、無駄な血を流さず暮らすをモットーとしていた。勿論、クリーナに取って自慢の兄であり誇りに思っていたようだ。しかし、そんなある日事態は一変した。その平和的思考に不満を持った軍勢が反乱を起こしたのだ。クリーナの兄は懸命に戦ったが……

「よりも寄って私の父の弟……つまり伯父が裏切ったわけよ。信じていた叔父に喉笛を食いちぎられてね……その所為で兄は命を落とし、兄を倒した伯父がウルフの縄張りで権力者となったわけ」

当然のごとく、クリーヌの伯父はクリーヌの兄とは違い好戦的で、下手をすればオリジンを手中に治めようとしているとのことだ。

そこで、命からがらウルフの縄張りから逃げ出したクリーヌはこの伯父に復讐するべく自身を鍛えていた。その中で、出来るだけ自分の事を手助けしてくれそうな仲間を探していたとのことだが……

「そのお眼鏡にかなったのが俺ってことか……」

「そうよ。さあ、話したんだから私のパートナーになつてよね！」

うん、この時はクリーヌが縄張りを抜け出した理由は分かった。

だけれど、俺にはもう一つ腑に落ちない事があるんだ。

「だったら、何故ルジーナさんはクリーヌの手助けをする気になったの？ 確かにオリジンを自分のものにするっていう思考は危ないし、下手すればここにも来るかもしれないけれど……やっぱり、利害の一致から？」

「……それもある。しかしな、我が危惧しているのは最近この縄張りに踏み行ってくるゴブリンの事なのだ」

ルジーナさんの見解はこうだ。何らかの方法でゴ布林達はウルフがオリジンを我がものにしようとしている事を知った。そこで、下準備のために東に住むゴ布林が西のウルフを偵察に行った。そのため、中央に位置するこの湖周辺でゴ布林を見かけた。

そして、恐らくゴブリン達はウルフ達が事を起こした瞬間もしくは、事を起こす前に何らかの行動に移す筈だ。そうなるのは中央に位置するルジーナさんが治めるこの湖が汚されてしまう。

簡単に言えば、両者が動いた場合自分にも被害が及ぶからその前にウルフを倒そうって訳らしい。

しかし、ルジーナさんも無茶をするな。ウルフの数は下手をすれば数百頭を超える勢いかもしれないって言うのに、そこに敢えて突っ込んで行くって言っているんだから……

流石に俺はルジーナさんを止めようと思ったのだが、どうにもクリーヌの話聞いて無用な血を流そうとしているクリーヌの伯父が許せなくなってきたみたいだ。その顔は明らかに不機嫌を通り越して憎々しげな表情になっている。……まあ、リザードマンの顔だから実際は無表情に近いんだけどね。

確かに許せないっていうのは同意するんだけど、本当に時と場合を考えて欲しいと俺は心の中で呟いた。

しかし、俺がどうこう言ってもルジーナさんの心は揺らぎそうにない。だったら俺が出せる返答は一つしかない。

「……はあ、わかったよ。二人だけじゃ心配だから俺も付いて行くよ」

「おお、流石ギンであ

」

「あ、ありがとう！」

俺が決意表明をした瞬間、ルジーナさんの言葉をさえぎり何故かクリーヌが俺にめがけて飛び着いてきた。俺の体は進化もしてか

なり大きくなったため、覆いかぶさるとまではいかないが、器用に俺の前足に抱きつくような格好になってしまった。

何故だろう？ 凄く……和む。

よほど心細かったのか、クリー又は少し嗚咽する声が漏れていた。その様子に流石にルジーナさんは何も言ってくる事は無く、眼を閉じて『シューシュー』と舌をチロチロと出し入れをしている。

俺はと言うと突然の事で少し驚いたが、これから頑張ろうっていう意味を込めてクリー又は抱きついている足とは反対の前足を使って優しく抱きしめた。

……心の奥底で『小型犬』って（ペット的な意味で）かわいいよなあ〜なんて思ったのは決して俺だけではないと信じたい。

・ ・ ・ ・ ・

その後俺たちはクリー又は誘われるままウルフの縄張りへと向かっていった。

3体で歩いているさなか、俺たちは今から縄張りを侵しに行くとは感じさせないほど自然体であった。

クリー又は俺に飛び付いた後、何故だか俺から離れようとしなかった。その小さな身体を俺の背中に預けた状態で、色々と話してくれた。

兄が大好きであった事……

その兄はレベルが6であった事……

今はいない父はレベルが9で先代の統率者である事……

小さい頃から兄に鍛えられ、レベルが3である事……
普通に暮らしているウルフは基本的に1〜2レベルが多い事……
兄を殺した伯父は5レベルである事……

俺はその話に相槌をうちながら歩き続け、その後ろをルジーナさんが一言も発する事なく着いてきた。

ウルフの縄張りへ向かう最中、何度か休憩を挟みながら俺たちは確実に近づいていった。

……そう言えば、歩いている途中で昨日からの空腹を思い出した。話題になるかと思い、それを口にしたところ何でか知らないが、突然クリーヌが背中から飛び降りて一人で森の中を走り抜けて行ってしまった。

俺とルジーナさんはあまりにも突然の事だが呆気にとられてしまったが、クリーヌの意図が読めず途方に暮れていると、程なくしてクリーヌは口に何かを啜えた状態で戻ってきた。

クリーヌの姿が見えたので内心で安堵してクリーヌを見つめた。そして、口に啜えているものをよく見ると、近くで捕まえたのか、血が滴り落ちている角の生えたクリーヌと同じくらいの大きさのウサギではないか。

見たことが無い動物な上に血が滴り落ちているという状態で内心では若干引き気味でいると、クリーヌはその角の生えたウサギを俺の目の前に無造作に置き

「べ、別にギンの為に捕ってきたわけじゃないからね！ これは……
……そう、私がホーンラビットの尻尾が食べたくなっただけで！ あ、余った部分が無駄になるからアンタにあげるだけなんだからね！」

……ナイス、ツンデレでいいのでしょうか？

そして、このウサギはホーンラビットって言うんだ？

そんでもって尻尾が食べたくなっただって……尻尾には肉が殆ど無
さそうに見えるんだけれど？

それを言おうとした瞬間、クリー又は有無を言わずに尻尾だけを
食い干切り、早々と咀嚼を繰り返し、飲み込んだ。

そして間髪いれずに俺の顔をじっと凝視し始めた。　　どんだけ控
えめに見ても、俺がこのウサギモドキを食べる姿を見ようとしてい
るのだろう。　　もう一つ付け加えると、何だかクリー又の尻尾が半
端なくくらいに振られていて、眼からキラキラした何かのエフェク
トのように出ている気がして居心地が悪いつたらありやしない。

それに、確かに俺は腹が減ったが流石にたつたいま仕留めたとい
わんばかりに血が滴り落ちている動物を食べるのに元人間である俺
にとつては若干どころか半端ない抵抗がある。

だが、クリー又が明らかに善意でこのホーンラビットを狩ってき
たのもまた事実だ。

まあ、何だかんだ言っただけは人間のもりだけれど、身体は間違
いなくワイルドキャットと言う魔物なんだ。　　生肉を食べたくらい
で命を落とす事もないのかもしれない。

そんな押し問答な状態で数秒間固まっていると、全く行動を起こ
さない俺を見て不安になったのか、クリー又の眼がどことなく不安
げに変わり、尻尾も先ほどまではブンブン振っていたのにペタンと
地面に付いている。

流石にこれ以上放置としてはクリー又に申し訳がない。　　俺は覚
悟を決めて、地面へと無造作に置かれたホーンラビットへとゆつく
りと顔を近づけて若干のためらいもあつたが、一気に齧り付いた。

「……意外と美味いかもしれない」

そんな俺の眩きにクリーヌがまるで自分の事のように嬉しそうな笑顔を浮かべていたのは見なかった事にしてあげようと思う。

さて、そんな事をしてしていると俺達はウルフの縄張りへと到着した。大体湖から5時間弱歩いたであろうか。辺りはルジーナさんの縄張りとは様変わりし、森林どころか草木の一本も見当たらず、ゴツゴツとした岩が剥き出しの状態で並んでいる。

「これはまた……すごく整頓されている縄張りな事で」

「率直に『何もなく殺風景』とさえいいではないか」

「何げに酷い事を言うわね……でもまあ何も無いって言うのは間違いないけれど」

クリーヌがいるから折角オブラートに包んだ表現を出したというのに、ルジーナさんが見事なまでに揚げ足をとった。

更にルジーナさんの歯に衣を言わぬ表現にすかさずクリーヌのツッコミが炸裂した。

……あれ？ 俺達ってここに戦いに来たのに和やかな空気が漂っていないかな？

最も、殺伐とした雰囲気よりは良いけれどね。

「まあいいわ。それでは早速……スウ」

オラア！！ 糞ジジイがあ！ テメエのタマア取りに来て
やったぜ！」

「ちょ、おまつ！ キャラ変わりすぎだろ！？」

「そんな事よりも貴様は大馬鹿者か！？ ワザワザ気付かれないよ
うに侵入したというに、自分から喧嘩を売ってどうするのだ！？」

何でか知らないが、突如としてクリーヌが敵陣真っ只中で挑発的
な言動を大声で叫ぶもんだから結果的に

「……なあ、なんでこうなっただっけ？」

「どこかの怒阿呆が考え無しに敵を挑発し、我らをまき添いにした
と記憶しておるが？」

「クツ……さ、流石に今回のことは、少し…ほんの少しだけやり過
ぎちゃったとは思っわよ！ でもねえ何が悲しくて同族のウルフ数
十体に囲まれなくちゃいけないのよ！？」

冒頭のような状況になってしまったのであった。

もう、ぶっちゃけ完璧にクリーヌが悪いよね？ っていうか何で
敵を挑発するような事をしたんだかマジで疑問だ。

クリーヌによく似た数十頭のウルフ達が俺達を取り囲むかのように出現した。見たところ、明らかにこちらに敵意を持っており、牙を剥き出し、その凶悪な口から低いウネリ声が四方八方から聞こえてくる。

しかし、それでも一斉に飛びかかってこないのは中心に現統率者の姪であり前統率者の妹であるクリーヌが居るのと、曲がりなりにもワイルドウルフと言う凶悪種の俺が居るためだとは思う。

そんな折、俺達を囲んでいたウルフの一角が開かれ、そこから他のウルフよりも大きな身体をしたウルフが一頭出現した。

言うまでもなく、恐らくあれがクリーヌ兄を殺して現在の統率者となった伯父なのだろう。見たところ、その眼にはこちらに対しての敵意等は全く見えず、ただ其処にある石ころを見ているかのような感じに俺は陥った。

「ジジイ……アンタを殺しに来たわ！」

「ハンツ！ 小娘がほざきよるわ。折角お前の兄が命を賭して逃がしたというのに……ノコノコと殺されるために舞い戻ってきたのだからな！」

そんなウルフの言葉に周りのウルフ達は下賤な笑い声を立て、クリーヌへと野次を飛ばしている。俺は唯、その様子を見ていただけなのだが、クリーヌの肩はプルプルと震えている。

それが怒りからくるものなのか、大勢の敵に囲まれたことによる恐怖からくるものなのかはわからない。しかし、クリーヌはこの場では俺達を頼ろうとはいつさいする様子は見えなかった。

俺とルジーナさんは互いに顔を見合わせ、クリーヌを見守った。

「別にアンタなんか怖くないわ！ それと、他の皆はどー！？ 下手な事をしたんならタダじゃおかないから！！」

「ククツ……どうやら身体は正直なようだ。ほら、死ぬ寸前の虫のようではないか！ ……ああそうそう、他の奴らだったか？ 知りたいんだったら 自分の眼で確かめな！！」

途端に、頭かしらの声を合図に俺達を囲っていたウルフ共が一斉に飛びかかってきた。

俺は次の瞬間、すぐさまクリーナの前に出て大きく息を吸い込んだ。後方に関してはルジーナさんに任せるけれど、問題は無いだろう。

そして俺は、一日ぶりに口から勢いよく炎を吐きだしたのだった

……

第十二幕（後書き）

一日遅れで申し訳ありません……

最近グダグダした感じになっている気がするかみかみんです。

少し補足説明を挟みます。

リザードマンであるルジーナが住んでいるのは巨大な湖設定ですが、そこに住んでいるリザードマンはルジーナだけです。

更に他の縄張りの魔物はリザードマンがルジーナ一体という事は知りません。

……以上、補足説明でした！

ではでは、感想&ご意見は随時お待ちしております！

第十三幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第十三幕

「あ、アンタ……何なのよ、そのブレスの威力？」

「やあ、ウルフの集団に囲まれているワイルドキャットことギンだよ。」

「俺は飛び掛かってくるウルフからクリーヌを守るため、咄嗟に炎を口からはいたんだ。」

「さて、よく考えてみよう。昨日、クラブの爪を食べるために火をはいたときはケットシーの姿だった。」

「しかもその時ですら、下手をしたら山火事レヴェルになるかもしれないくらいに威力が半端無かった。そんな俺が進化をして、尚且つ結構本気でブレスをはいたんだ。」

「口からは喩えではなくてガチでテレビで見たような火炎放射器から出て来る程に強力な炎が吹き出されるといって、半端ない現象が実際に発生中継な状態なのである。」

「その様子を見てクリーヌはあんぐりと口を開いており、炎の直撃を受けた数頭のウルフは物言わぬ黒炭へと一瞬で変化してしまった。流石に相手のウルフ達もこんなに凶悪なブレスをはく俺のことを無視できなくなったのかクリーヌを警戒しつつも俺の方への視線を強くしてきた。」

「フンツ……なんだ、ウルフとは脆弱な種族であるな。こんなボロ剣を装備したりザードマンにすら触れられぬとはな！」

「どうやら、背後で頑張っているルジーナさんも余裕で捌いているみたいだ。ってか、ボロ剣だっというのは分かっただけで持っている」

たんだ？

まあそれよりも、後ろは気にしないでルジーナさんに任せて前だけをみていればいいね。

「……貴様等、一体なんだ！？ リザードマンとわけのわからん種族が何故邪魔をする！！」

「ハンツ！ クソジジイなんかギン達が負けるわけ無いわよ！ なんてったって私のパートナーなんだから！」

「いや、自慢になっているようではない気がするんだけど？」

何て言うのか……そう、猫の威を借る犬みたいなの？

寧ろ、クリーヌの伯父さんはワイルドキャットっていう種族すら知らないんだ？

……あり？ だったら何でルジーナさんとクリーヌは俺がワイルドキャットって知っていたんだろう？

……謎すぎる、だけれど今はそれよりも目の前の敵に集中しておこう。

どこことなく釈然としない気持ちを抱きつつも俺は、壁のように織り成すウルフ達の向こう側にいるクリーヌの伯父である体格が一回り大きいウルフを見据えた。

俺と目が合ったウルフは一瞬だが身体を振るわせたようにも見えたが、すぐに俺のことを忌々しげな眼差しで睨み返してきた。

殆どの人間は無くしてしまっているが、こういった自然界に住む動物い備わっている殺気であろうか、俺と相対しているウルフからは言い知れぬ圧迫感が感じられる。

勿論、俺だってレベルの上に胡坐をかくつもりはないし、いくらレベル差があるとはいえ経験は間違いないであつちの方が上で、下手をしたら俺自身も大怪我をする可能性だつてある。　ここは、慎重に事を運んだ方がいいのかもしれない。

「まあ、そんなわけだから諦めてくれないかな？　つてか、君が暴れると正直言つて近所迷惑だから」

一瞬、近所迷惑と言つ言葉が果たして魔物に通じるのかが心配になつたけれど、この際気にしていられなかつた。

だつて、時間が立てば経つほど眼光が鋭くなつてきているんだもの。

明らかに答えはノーと態度で言いまくっている。

内心で冷や汗を大量にかいているものの、クリーヌにこれほどまでに頼られている手前、中々表には表出しにくい。

俺は『ハア』と軽くため息を吐くと、まず先に壁となっているウルフ達をどうにかしようと思考を働かせた。

さつきみたいに火を吹くのも良いんだけど、流石に生命を故意に消すというのは躊躇してしまう。

だったら、足を冷たい息で凍らせればそれだけで行動不能になるのではないのか？

そうと決まつたら俺は息を大きく吸い込み、肺内に空気溜め込んだ。

俺の様子を見て、再び火をはくのかと思つたのか、ウルフ達はそれを阻止するために一斉に俺めがけて飛び掛かつてきた。

しかし、それよりも俺の方が早かつた。　肺内に圧縮された空気を俺は目の前のウルフ達に向けて一気にはきだした。　瞬間的に辺

り一帯の気温が下がったような気がしたが、そんなことはお構いなしに俺は冷たい息をはき続けた。

途中、何だかあまりにも寒くなりすぎて目がシバシバしてきたので眼を閉じながらも俺は息をはくのをやめなかった。

「ギヤアアアアー!!」

「か、体が!?!」

「距離をとれー!!!! あれに触れると死ぬぞー!!」

はて? なにやら物騒な悲鳴が聞こえているようなのですが……

そろそろ息も続かなくなってきたと判断した俺は息を吐くのをやめて、恐る恐る眼を開けどんな状況になったのかを確認しようとした。

「……やだ、何か怖い」

そして、俺の目に飛び込んできた光景に俺は目を疑った。

だって、足元だけを凍らせようと思っていたのに目の前にいるウルフ達は煌びやかに光り輝く氷像と成り果てているのだから。

半ば呆然としていると何だか俺の腹部でモゾモゾと動く感覚があった。

突然の事すぎて反射的に頭を屈めて何が起きたのかを確認すると

……

「ちょ、ちょっと! アイスブレスも使えるの!?!」

「まあ……いや、それよりもクリーヌは何をしてんの？」

「な、何って……み、見て分かるでしょ！？　だ、暖をとってんのよ！」

何でか知らないけれど、クリーヌがブルブル震えながら俺の腹の毛にしがみついているのだ。

まあ、確かに辺り一帯はかなり冷え込んだじゃったけれど……そこまでか？

「くうおらあ！　アイスブレスを使うのなら一言ことわれ！　我はお主等のような恒温動物ではないのだぞ！」

おっと、どうやら後ろにいた筈のルジーナさんにも今の冷たい息は影響していたらしい。

流石にそこまで言われると今の息が相当えぐい攻撃だと悟った俺は、取り敢えず何も言わずに使ったことを謝罪するべくルジーナさんの方へと振り向いた。

「ごめんなさ　　うわゝ……」

振り向いた俺は又もや目の前の光景に驚き、再び固まってしまった。

若干……いや、どん引きですと言いたいくらいの光景だ。　だつて……

「ルジーナ……あんだ、ウルフの毛皮を身にまとつのは良いんだけど、身体真っ赤よ？」

「……グロ」

「誰のせいだと思っておるのだ!？」

クリーヌが代わりに代弁してくれたからいいや。でも、幾ら寒
いからって咄嗟に殺したばかりのウルフの毛皮をはぎ取って纏うつ
て……地味にすごいと思うのは俺だけなのかな？

おとと、そう言えば俺ってば今戦いの真つただ中だつた
んだよな？ 何だか、凄く和んだ感じがしていて少し忘れてしまっ
ていたよ。

俺は慌ててウルフのボスの方へと視線を戻した。後ろでは未だ
にルジーナさんが俺の腹にひつついているクリーヌとやんややんや
話しているけれど、それはこの際スルーしちやる。

俺が再び自分の方を見たせいか、ウルフのボスはかなり恐怖に支
配されているようだ。無理もない、目の前で仲間が冷凍庫に放り
込まれたと同じ状態になっているんだから。

たぶん、解凍しても助からないだろうな。なんて少し他人事の
ようにも感じてしまう俺はイケナイ子なのだろうか？

まあいいや、トラブルにも見舞われたけれど残すはウルフが数体
とボスのみ。 さつき確認したけれど、ルジーナさんも粗方片づけ
たようだ。

その間、レベルは高いはずなのにクリーヌはずっと俺の腹にひっ
ついているのが気になったがこの際どうでもいいや。

さて、残された奴らはどう出るのかな？ このまま続行しても良
いけれど、それだとおそらくって言うか間違いなく俺が勝つし……
俺的にはここを明け渡してオリジンから立ち去ってほしいんだけれ
ど……

「さて、どうする？ このまま続けるっていうのなら相手になるけれど……君たち勝てるの？」

「クツ……き、貴様には関係ない事だろう！ 何故ウルフ族の内輪揉めに入ってくる！？ 大体その小娘もだ！ 身内の失態を他の種族に任せるなど間違っているだろう！！」

「うわぁ～お、まさかの責任転換来たよ。……でもまあ、一理あるって言ったらそこで終わりなだけけれど。確かに、ウルフ族の内輪揉めに違いは無い。」

「こう言っちゃあれだけれど、クリーヌの兄貴が負けなければいいだけの話だったし、そもそもウルフを統括する奴の交代方法なんて俺は知らない。強い奴がなるっていうのなら負けた兄貴が悪いって話になるし……」

「うん、よくわかんなくなってきたぜ。」

「確かに内輪揉めに我等、湖を縄張りとする魔物がシャシャリ出るのはお門違いやもしれぬ……」

「ルジーナさん……」

「ちょ、ルジーナ！ アンタどうして……！！」

「どうやら、ルジーナさんも俺と同じことを思っていたようだ。」

「まあ、ルジーナさん的にはウルフ族がオリジン内の治安を脅かさなければ良いってだけの話かもしれないしね。」

「そしてルジーナさんは一拍置き、語尾に『だが』と続けて再び口を開いた。」

「だが、我等の友が助けを求めておるのだ、これは助けるのが道義であろう?」

口角をクイツと挙げて無表情ながらも意地悪そうな声色でルジーナさんはウルフのボスの言葉を切り捨てた。

「そうだね、ルジーナさんの言うとおりだ。でもここで俺達が君を倒すのは簡単だから」

俺はルジーナさんの言葉に被せて、一気に地面を蹴りウルフのボスの元へと駆け出した。

俺のあまりにも突然な奇襲により反応が遅れたのだろう、ウルフ達は一斉に実を固くした。更に、レベル30の俺の体の瞬発力は半端ないみたいだ。俺とウルフのボスとの距離は大体10メートル弱、それを本当に一瞬で詰めてしまったのだ。

あっという間に目の前に現れた俺の姿に眼をひんむかせたウルフのボス。しかし、俺のターンはまだ終わっていないぜ!!

俺は右前足を振り上げると、ウルフのボスの右足を力一杯殴り飛ばした。

足に伝わる肉と骨を砕く生々しい感触に背筋がゾゾゾとしたが、それも一瞬でカタをつけた。

俺が殴ったウルフのボスの右前足は無残にも砕かれ、関節上、向いてはいけない方向を向いている。そして、そのまま自分の体を支え切れなくなったボスは地面へと倒れこんだ。

「ほう、ギンは面白い事をするつもりようだ」

遠くの方で呟かれたルジーナさんの独り言はしっかりと俺の耳に

届いていた。どうやら、俺の意図をルジーナさんは理解してくれているみたいだ。

そして……

「クリーヌ、お前が兄貴の仇を取れ。なに、レベルが足りなくてもあつちは片足がないと同じなんだ。条件は変わらないよ」

俺は未だに俺の腹にひっついていくクリーヌに向かってなるべく優しく語りかけたのだった。

「へ、アタシ？」

恐らく俺はその時の間の抜けたクリーヌの返事を忘れる事は無いと思う。

第十三幕（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。

今話は少し短めにお送りさせていただいております。

さてさて、中々執筆が進まなくて年末に突入……恐らく来週の『R
e：俺！？』の更新が今年最後の更新となります。

誤字脱字報告&感想はいつでもお待ちしております。お気軽に書き
込んでください。

ではでは、かみかみんでした〜

第十四幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので

第十四幕

「ア、アアアアアタシが殺るの!？」

俺の戦えという言葉にクリーヌが上ずった声で、そして信じられないといった口調で慌てて聞き返してきた。

やあ、ウルフ族のボスの片足を八タキ一発で粉碎骨折させた現ワイルドキャットのギンです。

何だかんだやっているうちに始めは数十頭のウルフに囲まれているのですが、気が付くと殆どを撃沈させて今ではボスのウルフを除いて、この場には数頭のウルフしかいない。

そこで俺はクリーヌに兄の仇である現ボスを倒させる提案をした。ぶっちゃけ、先程のボスウルフが言っていた群内の内輪揉めに積極的に関わるのをやめた結果ではある。

け、決して生物を殺すっていう行為自体が嫌なわけじゃ……スミマセン、チヨシこきました。さつき、ウルフの団体さんを焼いたり凍らせたりしたせいで色々と限界です。もう私のライフポイントはゼロよ! って叫びたい衝動にかかれています。所謂、丸投げというやつですね……わかります。

「グツ……き、貴ツ様アア! やりやがったな!！」

あ、キレたみたいだ。

「ほらほら、クリーヌファイトだ」

俺はそう言いながら、未だに腹にしがみ付いているクリーヌをひ

っぺがした。

当のクリーヌは突然のフリに目を白黒させながらボスウルフと俺を交互に見返している。

それを何度か繰り返したあと、どこか覚悟を決めたような目でボスウルフを見据え地にしっかりと脚を着けた。

ルジーナさんもクリーヌのそんな様子を見て、刃零れしたサビサビな剣を腰へと納めながら俺に近付いてきた。

「やれやれ、ここまでお膳立てをしなければ動かぬか……相当、兄とやらに甘やかされておったのであるう」

「まあまあ、ちゃんと自分でやるって決めただからそう言わないの」

少し不機嫌そうに『シューシュー』言っているルジーナさんを宥めながらクリーヌの方へと視線をずらした。

相当、集中しているのだろう、さっきまでのクリーヌならばルジーナさんの軽口を言い返すくらいはしていた筈だ。

しかし、クリーヌはしっかりと前方でフラフラになりながら立っているボスウルフから視線をずらす事などなかった。

皆が無言のまま数秒……いや数十秒だろうか、もしかしたら数分経過したのかもしれない。

そんな時が曖昧な程の緊張感に支配されていく。そして、最初に動いたのは無傷な状態のクリーヌの方だった。

ゼロスピードからの加速……そのスピードは明らかに先程まで戦っていたウルフのソレを凌駕している。

クリーヌのレベルは3、聞いた話によるとこの地にいるウルフ達は1・2レベルとクリーヌと比べたらあまり変わらない。

だが、現に今俺の目の前では殆どレベルが変わっていないはずなのにそれ以上の速度を出しているクリーヌがいる。

しかし、これは俺にとっては予想外な事だった。クリーヌのレベルは前述の通り3……そして相手のボスウルフは片腕を潰しているとはいえ5……腐っても2レベルの差がある。

しかも、加えてボスウルフはクリーヌの身体より一回りも二回りも大きい。

つまり、片腕が無いっていうハンデはポテンシャルの高さを考慮するとあまり意味がないのかもしれない。

「なんだ、クリの事が心配なのか？ 心配あるまいて、奴ならばなんとかするだろうよ」

「そつ……ですな」

未だに心配を続けている俺の姿を見て、フォローに回ってくれたルジーナさん。

そつだな、本当に俺の杞憂ならいいんだけど……

だが、俺の予想は無情にも本当の事となってしまうのだった。

真っ直ぐ一直線にボスウルフへと突貫するクリーヌであったが、相

手も脚を砕かれただけでは戦意を喪失していなかったみたいだ。クリーナが飛び掛かった瞬間、砕かれた脚をまるで鞭のようにしながらクリーナの身体を弾き飛ばしたのだ。

「……っ、見ていただけで自分の脚が痛くなってくる錯覚に陥るよ……」

「……お主がやった事よな？」

正にグウの音も出ないとはこの事だと、ルジーナさんのキツい一言をいただいて感じた。

「……ッ……ま、まだまだあ！」

だが、クリーナも諦めてはいなかった。

弾き飛ばされながらも空中で体勢を立て直すと、地面に脚をついた瞬間には直ぐに地を蹴だしボスウルフへと向かっていった。

しかし、何にも策が無い状態で闇雲に突っ込んで行っても先程と同じようにボスウルフの鞭のようなカウンターを受けて吹き飛ばされる。

……成る程、例え不意打ちで前ボスを倒したとはいえ、腐ってもボスになったウルフか。一筋縄にいかないみたいだ。

ルジーナさんも俺と同じ考えのようで「クリーナには早かったか……」と呟いている。

こいつは……いよいよ危なくなってきたかもしれないな。

「……もう一丁！」

しかし当のクリーナは諦めたり、どの様に攻め込むかは一切考えずに只我武者等に突撃していく事をやめようとはしない。

そんなクリーヌを邪魔することが出来る筈もなく、徐々にだがボロボロになっていくクリーヌの身体を俺はただ目を背けないで見ているだけであった。

周りに居るウルフ達は始めこそクリーヌの方を忌々しげに見ていたが、今ではボロ雑巾のようになっていくクリーヌを見て自分達のボスの勝利を確信したのか今では俺とルジーナさんを囲って何時でも飛び掛からんとばかりに牙を剥き出しにして低く唸っている。

多分、クリーヌの敗北が決定した瞬間と同時に俺達に襲い掛かってくるつもりなのだろう。……え、いくらなんでも無謀だと思っ
のは俺だけでしょうか？

「心配せずとも、ただの牽制であるぞ。我等が無闇に助けださぬようにな」

「うお！ エスパールジーナ、略してエスルジ降臨!？」

「……なんだそれは？ まあよい、それよりもギンは今度の戦い、どうみる？」

動じないルジーナさん……そこに痺れる憧れるう!!

「今、不穏な事を考えたな？ まあよい、どの道お主はクリーヌが勝つと踏んでおるのであるう。ならば、我等はのんびりと観戦するまでよ」

……結局、ルジーナさんもクリーヌが勝つと思っているもんだから、周りのウルフは気にしない方針なわけか。取りあえずは、俺もルジーナさん見たくのんびりと観戦しておこうかな。

そう決めた俺は再びクリーヌとボスウルフへと眼を向けた。し

かし、どうにも先ほどと変わったところは無く、相変わらずクリー
又は突っ込んでボスウルフに弾かれて……ん？

何故だろうか、さっきと同じ様子を見ているはずなのになんだか
少し違う気がする。

「グツ………さっさとやられぬか小娘が!!」

「うっさい、バーカバーカバカ!!」

……そうか、クリー又はあまり変わっていないがボスウルフの動
きが鈍くなってきているのか。と言うよりも疲れるのが速まって
いるみたいだ。

理由を考えたのだがそれはすぐに理解する事が出来た。 ついさ
つき俺が砕いた脚を鞭のように使っていたボスウルフだ。 唯でさ
え重症な怪我を根性で武器のように使っていたのだがそれが限界に
来てしまったという理由だ。

やっぱり、魔物の思考能力と言うのは人間のそれとは違うのだろ
うか？ ってか、怪我した脚を酷使したら悪化するっていうのはす
ぐにわかるようなものだと思うんだが……

俺はボスウルフの事を少し呆れながらも続きを観戦した。 だけ
れど、ボスウルフの動きがおかしくなったのは分かった。 でも、
クリー又はあれだけポロポロになりながらもその動きは始まった時
と寸分変わらずに俊敏な動きをしている。 それについては何故？
と言いたくなくなった。

だって、体毛で怪我の部位は確認できないけれど弾かれるたびに
赤い液体が飛び散っているのだ。 どう見てもあれはクリー又の血
だと思う。

つまり、アイツの怪我も相当なはずなんだ。 だけれど、その動
きは始まった時と変わらない……いや、寧ろ早くなっていないか!？

「ルジーナさん、クリーヌの奴……」

「フフツ、言わずともわかっておる。クリの身体の側面……レベルの印を見てみる。面白いものが見れるぞ」

クリーヌのレベル印？ ……多分、あの刺青みたいなものだよな？ 確かクリーヌは体の側面に3本の線が入っていたはずなんだけれど。

俺はルジーナさんに言われるがままクリーヌの体の側面に刻まれたレベル印を見てみた。ずいぶん遠くに位置しているけれど、なんとか確認する事が出来た。

俺はそこで違和感を覚えたんだ。確かクリーヌのレベルはさつきも言った通り3レベル。しかし、クリーヌには4本の線が刻まれているんだ。

どういう事だ？ ……いや、考えるまでもないか。簡単な事だ、クリーヌはこの短い時間の間にレベルが2つも上の敵を相手にする事によって経験値をためて晴れてレベルが4に上がったのだ。

「……いやいや、普通に感心しちまったけれどスゲーよクリーヌ！まさか実戦でレベルアップするなんて！」

「どうやらクリーヌは元々の個体値が高かったたのであろう、そのためある意味で恵まれた環境かなのやもしれぬな」

……ルジーナさんの言い回しは難しいけれど、要はポテンシャルが高いから少し鍛えれば凄く強くなるって解釈で良いんだよね？

そんな事を考えている間もクリーヌの突撃は止まらない。ついさっきまでは相手にすらならなかったクリーヌの突撃は怪我をした

ボスウルフを怯ませるには十分だったようだ。

更には、さつきも言った事だがあまりにも酷使してしまったボスウルフの脚は使い物にならないようだ。クリーヌはまるでこの時を待っていたかのように先ほどまでは正面からの攻撃しかしていなかったが素早い動きで後方へと回り込んだ。

急に回り込まれたボスウルフは慌てて向きを変えようとしたのだが、下肢より流れる激痛に動きが鈍りクリーヌの早さに追い付く事が出来なかった。

その一瞬をつき、クリーヌはボスウルフの背中に飛び乗った。

乗られたボスウルフはなんとかクリーヌを振りほどこうと身体を揺するが、片脚が上手く機能していないためバランスを上手くとれず、差程大きな揺れを起こすことが出来ずにいた。

クリーヌがそれを見逃す筈もなく、背中を伝い走りボスウルフの右耳へと力一杯噛りついた。

途端、耳に激痛が走ったボスウルフは自身の体勢が崩れるのもお構いなしに激しくもがいた。しかし、クリーヌは爪をしっかりと立て、更には耳に噛りついている為、容易には離れる事はなかった。

そして、クリーヌは噛りついているボスウルフの耳を食い干切った。

「ギヤアアアアア！」

耳を突く醜い悲鳴とともに噴き出した夥しい量の血……それは背に乗っているクリーヌへとまるでシャワーのように降り注ぎ、茶色の毛並みのクリーヌを真っ赤に染め抜いた。

しかし、クリーヌの猛攻は止まることなく、次にはもう片方の残った耳を咬み、更にこちらも食い干切った。

「もう、もう止めてくれ！ これ以上俺を喰わないでくれえ！！」

両耳をクリー又によって食い千切られ、既に戦意を喪失したボスウルフはボスの威嚇などを全く感じさせないくらい情けない声で命乞いを始めた。

これ以上、痛い事をしないでくれ……これ以上、自分を食べないでくれと……

周りにいたボスウルフの近しい者達はそんな自分達のボスの情けない姿を目の当たりにしてしまい、幻滅したのか、一匹……また一匹とこの場から立ち去っていく。

だが、そんな様子にお構いなしにボスウルフは醜く命乞いを続けた。

「フツ、可笑しいわね。兄さんを殺しておきながら自分は命乞い？ みつともないっいたらありやしないわ！」

そんな情けない奴が自分の兄を殺したと言う事実には憤怒したクリー又は食い千切った耳を吐き出すと、前脚を振り上げ、爪を立てた状態で両眼へと振り下ろした。

そして次の瞬間、クリー又はその前脚を眼球へとめり込ませた。あそこまでしたら、間違いなくボスウルフの両眼は潰れ、奴の視覚から永遠に光が失われてしまっただろう。

俺はその様子を唯唯、他人事のように見ていることしか出来なかった。

「ぎ……ぐが……お、俺の……俺の目がああああ……！」

当然だが、ボスウルフは痛みにもがき苦しんだ。

「……アタシは慈悲深いのよ、これで兄さんを殺した事は許してあげる……て言っても耳がなくて聞こえないだろうし、目が無くちゃ生きる事もままならないけれど……敢えて鼻は残してあげたんだから感謝しなさいよね」

クリー又はそう言い残すと興味を失ったかのようにヒラリとボスウルフの背中から降りて足早に俺達の元へ近づいてきた。先程まで俺達を取り囲んでいたウルフ達の姿は既に無く、クリー又は真つ直ぐとこちらへ来た。

その目は大きなことをやり終えた達成感と自分の復讐相手の姿から自分の兄がこんな奴に殺されたという悲しみ諸々が要り交ざっていた。

「中々やるではないか」

「……アタシを誰だと思ってるのよ？」

戻ってきたクリー又にもルジーナさを若干皮肉が交じったような声で労った。クリーも同様に軽口で返す。

さて、俺は何て言って労おうか……でも、取り敢えずは

「俺のパートナーだろ？ 何はともあれ、頑張ったな。偉いぞクリー又……」

そう言いながら俺は赤く血に染まったクリー又の身体をなるべく優しく包み込んだ。

それが切っ掛けになったのかクリー又の身体は徐々にだが小刻みに震えだし、嗚咽が聞こえはじめた。

俺とルジーナさんはなるべくその泣き声を聞かなかったことにするためにゆっくりと瞳を閉ざすのであった。

第十四幕（後書き）

あけましておめでとうございます！かみかみんです。

新年一発目の更新となります。

今話では少しだけグロ表現も入れましたが、あまり生々しくならな
いように注意もしてみました。

しかし、戦闘描写は難しい！誰でも良いのでコツを教えてください
すね。

ではでは、感想&ご意見&誤字脱字報告は随時受け付けております。
気軽に書き込んでいただけると幸いです。

それでは次回をお楽しみに。

第十五幕（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物・団体名は架空のもので、

最後にお知らせがありますので、あとがきも見ていただけると幸いです。

第十五幕

「悪かったわね……」

やあ、無事にクリーヌが敵討ちをしている様子を眺めていたギンです。

敵討ちをしたあと、クリーヌは俺の腕の中でひとしきり泣いた後、フと我に振り返り気まずそうな顔で俺に謝罪した。多分、迷惑かけてゴメンという意味なのだろうが、俺自身は余り気にしないのでクリーヌにはそう伝えた。

「ッ！……ふ、フンだ！ ギ、ギンは私のパートナーなんだから当然よね！」

……ただ、こう切り返されて少し困ったが。

「……でも、ありがとう」

ん？ いま、小声で何かを言った気がするんだけど……気のせいかな？

まあ気を取り直して俺達はその後、ボスウルフに捕らえられていたというクリーヌの仲間の捜索にあたった。

なんでも、数自体は多くはないけれどクリーヌのようにボスウルフにクリーヌの兄……前ボスウルフを殺されて恨んでいる奴らがいるとのことだ。

後は彼らを解放すればこの一件も終わるらしい。折角乗り掛かった船だ、俺とルジーナさんはクリーヌを手伝い、行方不明の仲間

とやらを探すことにした。

・
・
・
・

何というか、搜索開始おおよそ5分で目的は達成されてしまった。岩場ばかりのウルフの縄張りの中で一カ所だけ洞窟……と言うか天然の洞穴みたいなところを見つけたんだ。

岩影から隠れて見たところ、入口にはボスウルフが敗れた事を知らないであろう見張りっばいウルフが5頭いる。

更に俺の反則気味な視力で確認したところ、その奥には数頭のウルフが縮こまっているのも確認できた。恐らくあれがクリーヌの探している仲間なのだろう。

見たところ、洞窟周辺には見張り以外のウルフは確認できない。

寧ろ、さっき逃げ去って行ったボスウルフの近しい奴らはどこ行つたのが謎だったが、見張り連中に何も告げることなく姿を消したらしい。

まあ、それについてはどうでもいいや。

「見張りが5頭……中には数頭のウルフが見えるけれど……なんで中にいるクリーヌの仲間のウルフ達は無理して出ようとしらないんだ？」

「きつと、クソジジイが敗けたっていう事を知らないのよ」

……成る程、脱走したら追い掛けられて捕まったら殺されるって理解しているから下手に動けないんだ。

だったら早いところ出してあげたほうが良いかな。

「ルジーナさんとクリーヌはここにいて、見張りをちゃちゃっと倒してくるからさ」

「うむ、了解したぞ」

「任せたわギン」

そう言い残すと俺は岩影から飛び出して真っ直ぐ洞穴へと向かっていった。

一方の見張りウルフ達は突然現れた俺の姿に警戒の色を濃くした。無理もない話だ、オリジン内で過ごすウルフにとって俺ことワイルドキヤットは未知の魔物なんだから。

取り敢えず俺はイキナリ飛び掛かるのもどうかと思ったので、手始めに話し合いから始める事にした。

「君らの現ボスは前ボスの妹であるクリーヌが倒した。無駄な抵抗はやめて人質を放すんだ……いや、この場合は犬質の方が良いのか？ いや、ウルフは狼の事だから狼質の方が正解かな？」

フト頭をよぎった疑問をついつい口に出してしまった俺は傍から見たら空気の読めていない奴だと後から振り返って感じた。

さて、俺の一方的過ぎる物言いにたいしてだが、5頭の見張りウルフ達は当然の如く信じることはなく一斉に牙を剥きその内の一頭が飛び掛かってきた。

俺的には前も言った通り、血を見るのが好きではない。慣れると命令されてもこれから先、嫌いなままだろう。

だから、今の俺の言葉を信じてこの場から立ち去ってくれる選択肢をウルフ達には選んでほしかった。

だがしかし、ウルフ達はみすみすそのチャンスを捨ててしまったのだ。こうなってしまうては、俺は最後の手段を取らざるをえない。

俺は短く溜め息をつくくと、一気に地面を蹴り俺に飛び掛かってきたウルフの眼前へと移動した。きっとウルフ達は困惑したことになる。

見たことの無い魔物が自分達が想像していた以上の速度で間を詰めてきたのだから……

しかし、時は既に遅すぎる。攻撃態勢はとっていたが、カウンターを狙われるとは予想はしていなかったのだろう。まともな迎撃態勢をしていなかったウルフへ目がけてその頭部から振り下ろすかのように腕を振るった。当然のごとく日本刀以上の斬れ味を誇る爪をフルオープン状態だ。

余りにも突然な事なので、ウルフ達は目の前で起きた事を瞬時に理解出来なかったであろう。

その所為か、俺が爪を振るったウルフ以外の4頭のウルフは身を堅くしている。一拍置き、真っ先に飛び掛かってきたウルフの頭部が文字通り『ひしゃげた』。

瞬間的に水風船が割れたかのように液体は飛び散り、地を深紅に染めあげた。そして、その返り血を浴びてしまった俺は最後になるであろう通告をした。

「まだ……やるか？」

その俺の言葉が最後通告であると残されたウルフ達は本能的に感じ取ったのだろう。4頭のウルフは尻尾を丸めて我先にへと俺に背を向けて同じ方向へと逃げ出した。

それはもう、必死になり逃げ去って行った。俺はその後姿を眺

めながら、逃げていった以上、捨て置いてもいいと判断し洞穴内部に囚われているウルフ達の方を見た。

『ガクガクブルブル』

「……うわゝお、こういう反応されるとかなり心が抉られるな」

何故か……ではないか、今しがた目の前で同族の頭が吹き飛んだって言うのに怯えないって言うのがおかしい話だ。それに今の俺の姿は銀色の毛並みに真っ赤な返り血を被っている状態で恐ろしさがより一層際立っているのかもしれない。

でもまあ、取りあえずは数の確認だけはしておくとしようかな。

俺は洞穴へと足を踏み入れて口を開いた。

「別に捕って喰いはしないよ。取りあえず、代表の方は前に出てもらってもいいかな？」

俺の声に少しざわめきが起こり、ウルフの集団の真ん中がモーゼの滝のようにわかれた。そして、その先に他のウルフよりも少し小さなウルフが立っている。

俺の眼を真っすぐ見据えているが、明らかにその眼には恐怖の色が濃く見受けられた。

「君がこの中で一番偉いウルフかな？」

俺はなるべく相手を威圧しないように声をかけた。周りのウルフ達が一瞬、声を引き攣らせたが、そんなのに構っている暇はない。

「は、はい……わ、私が皆の代表のア、アイリーンで、です……」

……無茶苦茶怖がられているぞ俺！？　つてか、この子女の子か。声はクリーヌに似ている気がするな……大きさはクリーヌよりも一回り小さい気もするけれど。

「まあいいや、ここには何頭のウルフが居るの？」

「え、えと……お、お答えはしますが……お、お願いです！　私の事はどうなってもかまいません、なので他の皆は……他の皆の命だけはどうかお助けください！！」

そう言うつや否や、一人気丈にふるまっていたウルフの女の子は身を伏せ俺の方を見上げた。

「あの俺は……」

「いいや、アイリーン様ではなくて俺を喰ってくれ！」

「いいえ、私を！」

「儂を！」

「僕を！」

次々とウルフ達が生贄志願をしますもんだから大変だ。 ……何
だか、俺ってば物凄く悪者になっていないかな？

「なに怯えさせてんのよー！ー！！」

どうするかを悩んでいると、聞きなれた女の子の怒声と後頭部に
虫が当たったかのような衝撃がはしった。
ってか、誰かなんて考えるつもりはない。

「いや、俺もそんなつもりはなかったんだけど……」

俺はそう言いながら声の方へと振り返った。 そこには少し不機
嫌そうな顔をして洞穴入り口で立っているクリーヌとその直ぐ後ろ
で無表情ながら少し困ったような雰囲気醸し出しているルジーナ
さんがいた。

「 お、おおお姉様！？ 」

「 姫様！？ 」

あれ？ なんか意外な反応……

・ ・ ・ ・ ・

何だかよくわからない感じだったけれど、捕らえられていたウル

フの中にクリーヌの妹がいたみたいだ。その妹っていうのが、さつき代表として俺の前に出てきたアイリーンって子らしいんだ。後は言わずもがな、感動の再開中だったり……

「ご、ご無事で何よりですおおお姉様……」

「いや、流石に私も死ぬかと思ったわ。あ、それとあのクソ爺なんだけれど再起不能にしておいたから」

「す、素晴らしでですねお姉様……」

「……ねえ、いい加減怯えながら話すのやめない？」

クリーヌの後ろに待機していたのがいけないのか、妹ちゃんが何故か俺とルジーナさんの方をチラチラ見ながら会話をしているという至極落ち着かない空気になってしまっている。

話しているクリーヌもだんだんとイライラが募っていったようで、指摘している。

「で、ですが……そちらのリザードマンさんと……種族がわからないのですがネコ科の魔物さんは一体……？」

「こいつ等？ こいつ等はね、私のパートナーと友達よ！」

妹ちゃんの問いにクリーヌはドヤ顔で答えている。ってか、微妙に妹ちゃんが欲しい答えになっていない気がするんだけれど。

俺はルジーナさんに目配せをして話をまとめるようにお願いした。ルジーナさんも俺の言いたい事を理解してくれたのか、小さな溜息をついた後ウルフ達の方を見て口を開いた。

「我は中央の湖を縄張りとしているリザードマン、コレは私の仲間のワールドキヤットだ。何故ここに来たのかと聞かれたら……まあ長くなるので気が向いたからと答えておこう」

……俺つてばコレ扱いなんだ。少し、ほんの少しだけぞんざいな扱いすぎて涙が出てきそうな気がしたぜ。

でもまあ、ルジーナさんの言っている事は少なくともクリーヌよりはわかりやすく良いかな。

「まあそんな事は良いじゃない。あの鬱陶しいクソジジイは居なくなつたんだし、これでウルフの集落は安泰だわ」

まるで言い方が忘年会でのサラリーマンみたいな言い回しでクリーヌが一息ついた。その言葉を聞いた妹さんは何故か驚いた表情になりクリーヌへと問いかけた。

「お、お姉様……一体全体何が何やら事情がさっぱりなのですが…

…」

「おっと、そうだったわね」

そしてクリーヌ又は妹さんにこれまでの出来事を多少の誇張表現を交えながら自慢気に話し始めた。

ボスウルフを倒すために仲間を探したこと、気が付いたら中央の湖の縄張りに侵入したこと、俺やルジーナさんが是非とも同行させてくれと懇願したこと、ボスウルフをクリーヌが見事なステップで翻弄させ打ち破ったこと……

うおい！ 誇張表現どころから捏造が入っているぞ。
誰が懇願したんだっての！

ふと、ルジーナさんの方を見てみると俺と同じように納得出来ないような雰囲気醸しだしていた。

しかし、それでも何も言わなかったところを見ると、折角喜びに満ちあふれている空間に水を差すような事をしないと言うルジーナさんなりの優しさなのかもしれない。……俺も我慢しよう。

「そうだギンよ、見張り達を逃がしたようだが問題無いたのかわ？」

「どうだろ……俺は無闇な殺生は好きじゃないからね」

「そうか……ややこしい事にならねばよいが……」

ふと疑問に思ったのが、ルジーナさんが俺に聞いてきた。

でも、確かに見逃しちゃったけれど、後のことを余り考えてなかったからね。変な事にならなければ良いんだけど……

そんな事を考えていると、クリー又達は話したいことを終えたのか、俺とルジーナさんの方へと振り返った。

「いや、ホント世話になったわ、アンタ達のおかげで何とかここまでこじつける事が出来た……ありがとうね」

「お、おおお姉さまがチャンとお礼を言うなんて……もしかこれは……夢なのですか？」

……クリー又の言い方がたまにキツいと感じたのは俺たちの事を警戒して使っていたんじゃないかと、素だったんだ。

それよか、妹さんのほうが人格的には出来上がっていると思ったが決して口には出さなかった俺はエライと思う。

「では我等は行くぞギン、何時までもあの場を留守にするわけにはいかぬのでな」

ちよつと酷い事を考えていたところ、ルジーナさんが帰ろうと言つてきた。

確かにルジーナさんの言う通り、縄張り持ちのルジーナさんが何時までも留守にするわけにはいかない。しかし、その言葉をよしとしない者がいた。

「ええ〜っ！ 帰っちゃうの！？ もっとゆっくりしていきなさいよ〜」

言つまでもなく、クリーヌだつたりする。彼女の言わんとすることもわかる。折角ノンビリしようと言う矢先、ある意味で活躍していた奴らが帰ると言っているんだ無理もない。

「そうはいかないよ、ルジーナさんは中央の湖のボスなんだからと言つわけで、妹さん達もまたねっ！」

「え、いや、あのっ……本当にありがとうございます。このご恩は一生忘れません！」

そんなありきたりな言葉を残して俺とルジーナさんは自分達の縄張りである中央の湖に戻っていくのであった。

・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

「とまあ、そこで終われば良い話だからで済むんだけど……」

さてさてここは湖の畔、決してワープで帰ってきたのではなくてちゃんと歩いて帰ってきたんですよ。

そして俺とルジーナさんは今、またもや現れた問題に直面してしまっている。……いや、問題と言ってもいいものかは知らないけれど、ある種の問題と云うか……予想外過ぎる出来事と言いますか……

「なんで

クリーヌが中央こしに居るのかな？」

何故か、ウルフの縄張りで別れたはずのクリーヌがさも当然という感じの顔をしながら俺達の目の前に居るのですから………

第十五幕（後書き）

ありがとうございましたかみかみんです。

ここで一つお知らせがあります。活動報告にもちに書く予定なのですが、本日から二月末日まで執筆活動を休止させていただきたいと思っております。

詳しい内容につきましては活動報告をご覧ください。
皆さまにはご迷惑をおかけいたしますがご了承ください。

では、感想&ご意見&誤字脱字報告は随時受け付けております。
それでは、次回の二月か三月にまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277v/>

弱いからこそ強くなれる！

2012年1月14日06時52分発行